商會北樺太炭田ニ關與ス

我艦隊ノ炭坑視察（明治三十八年七月）

力ト信用トニ依リ多クノ鑛區ヲ許可セラレ又他鑛區ヲ買收統合シ最大ノ鑛業權者トナルニ至レリ**ブリンネル**氏之ニ次ギ其他**クラシノソニコフ**、**リンケウイツチ**、**グツネツオフ**氏等亦鑛區ヲ許可セラレアリ

後年三菱**スタヘーフ**ノ共同經營セル**ロガチー**坑ノ如キモ一九一六年**スタヘーフ**商會**ガリンケウツチ**氏ヨリ買收セルモノナリ

因ニ明治三十八年（一九〇五年）七月日露戰役末期ニ於テ我艦隊亞港一帶ヲ占領スルヤ下條第三艦隊機關長、伊東第四潛隊機關長ハ艦隊職員ヲシテ附近炭坑ヲ視察調査セシメタリ

（終）

山本唯三郎**クレー**ノ事業ニ提携シ現地踏査ノ爲軍艦便乘ヲ出願ス（明治四十五年）

第二章　邦人ノ探險、調査、着手時代

（大正九年軍事占領迄）

明治三十七八年戰役ノ末期我軍北樺太亞港ヲ占領スルヤ附近炭田ニ就キ視察調査セリ而シテ東海岸油田ニ關シテモ豫テ聞知スル處アリシガ進デ之ヲ調査スルニ至ラズ時局平定シ同地ヲ撤退セリ又平和克復後樺太國境ノ劃定ニ際シ我委員ハ北樺太ニ於ケル**クレー**ノ石油事業ニ付聞ク處アリ志加重昂氏ハ原油ノ見本ヲ得テ持チ歸リタル由ナルガ其成行ヲ詳ニセズ其他横須賀鎮守府燃料調査委員（第三編第一章參照）時代ヨリ北樺太油田ニ關シ外國文獻ノ本邦ニ傳ヘラレシモノ少ナカラザリシガ要スルニ當時我海軍ノ燃料油資源ニ對スル關心ノ範圍ハ主ニ內國油田ニ限ラレタルモノノ如シ而シテ明治三十九年重油燃料採用ノ方針決セラレ爾後新艦ノ增加ニ伴ヒ漸次石油資源ニ關スル當局ノ關心ヲ深ムルニ至レリ

時ニ第一章ニ記述スルガ如ク天津ニ**クレー**ノ支那石油會社起リ北樺太ニ油田作業ヲ開始セシガ同社ハ將來出油ノ場合ニ於ケル一手販買ノ件ヲ同シク天津ニ在リシ松昌洋行主山本唯三郎ニ諮リ同人モ大ニ之ニ期待シツツアリシモノノ如ク而モ其後容易ニ出油ノ運ビニ至ラザリシタメ山

海軍ノ援助ニ依リ石川技師**チヤイオ**附近踏査（明治四十五年七月）

本ハ其舊知石川貞治（札幌農學校出身嘗テ鑛物地質調査所ニ勤務又**インターナシヨナルオイル**會社顧問タリシト云フ）ニ囑シテ現地ヲ調査セント欲シ明治四十五年初夏ノ頃右石川及隨員ノ艦船便乘ヲ海軍ニ出願セリ此頃ハ海軍モ既ニ艦船燃料ノ問題ト關聯シ北樺太油田ニ留意シツツアリシ折柄ナリシヲ以テ之ヲ機會トシ同年六月恰モ邦領樺太測量任務ニ從事セル軍艦大和（艦長海軍中佐兼子昱）ニ右一行ノ便乘ヲ許可シ且調査上ノ便宜ヲ供與スルコトトセリ

石川技師外三名ハ六月十九日大泊ニ於テ大和ニ乘艦同艦ハ六月三十日**チヤイオ**附近ニ至リ上陸地ヲ物色シタル末七月二日ニ至リ漸ク一行ヲ**チヤイオ**ニ上陸セシメタリ

石川等ハ同月七日マデ陸上ニ在リテ**チヤイオ**、**ボアターシン**、**ヌトウ**油田ヲ踏査シ歸來其ノ調査ヲ海軍省ニ報告スルト共ニ之ヲ日本石油會社ニモ示シ其ノ有望ナルコトヲ力說セシガ當時ニ於テハ未ダ我當業者ヲ動カスヲ得ズシテ止ミタリ而モ本調査ハ我官民ガ北樺太油田ニ實際進出セル始ニシテ同油田史上重要ナル階梯ヲナセリ依テ當時ノ事情ヲ窺フベキ二、三ノ文書ヲ摘要スルコト左ノ如シ

明治四十五年六月十一日　海軍次官ヨリ大和艦長宛　電報

北樺太油田踏査ニ付大和艦長宛電報（明治四十五年六月）

命ニ依リ左ノ件申進ム

一、十八、九日頃大泊到着ノ豫定ナル　元北海道廳地質、鑛物調査ニ從事セシ拓殖務省技師石川貞治及其隨行者兩三名ヲ大泊ニテ便乘セシメ樺太東海岸**ツチヤイオ**（北緯約五十二度半）ニ到リ同地ニ上陸セシメ同人ノ都合ニ依リ便宜再之ヲ還送スベシ

二、同人等等ノ目的ハ**ツチヤイヲ**附近ノ石油產出狀況ヲ探知スルニアリ本件ニ關シテハ成ルベク便宜ヲ與フベシ

三、貴艦同地航行ノ件ハ露國政府ヘハ照會シアラザルニ付外間ニ對シ秘密ニナスベク若シ露國官憲又ハ露國人等ニ對シ寄港ノ目的宣明ノ必要アレバ五十度以南測量中濃霧等ノタメ豫定地ニ到ル能ハズ淡水生糧品ヲ需ムル爲寄港ノ止ヲ得ザリシトスルカ又ハ貴艦ハ豫テ測量ノ傍密獵船取締ノ訓令ヲモ受ケ居ルモノト稱シ臘納ノ密獵日本船ヲ追躡シ荒天若ハ濃霧ニ妨ゲラレ其位置ヲ失シテ茲ニ至レルモノトスルヲ可トス

又石川一行ハ測量班ニ從ヒ五十度以南ノ地質調査ニ從事スルモノナルコトヲ以テスベシ

右寄港ノ口實ニ就テハ先方ノ疑念ヲ招カザル樣ニ其時ノ情況ニ應ジ適宜取捨スルモ差支ナシ此場合ニ於テハ事後速ニ報告スベシ

海軍ノ援助ニ依リ石川技師**チヤイオ**附近踏査（明治四十五年七月）

本ハ其舊知石川貞治（札帆農學校出身嘗テ鑛物地質調査所ニ勤務又**インターナシヨナルオイル**會社顧問タリシト云フ）ニ囑シテ現地ヲ調査セント欲シ明治四十五年初夏ノ頃右石川及隨員ノ艦船便乘ヲ海軍ニ出願セリ此頃ハ海軍モ既ニ艦船燃料ノ問題ト關聯シ北樺太油田ニ留意シツツアリシ折柄ナリシヲ以テ之ヲ機會トシ同年六月恰モ邦領樺太測量任務ニ從事セル軍艦大和（艦長海軍中佐兼子昱）ニ右一行ノ便乘ヲ許可シ且調査上ノ便宜ヲ供與スルコトトセリ

石川技師外三名ハ六月十九日大泊ニ於テ大和ニ乘艦同艦ハ六月三十日**チヤイオ**附近ニ至リ上陸地ヲ物色シタル末七月二日ニ至リ漸ク一行ヲ**チヤイオ**ニ上陸セシメタリ

石川等ハ同月七日マデ陸上ニ在リテ**チヤイオ**、**ボアターシン**、**ヌトウ**油田ヲ踏査シ歸來其ノ調査ヲ海軍省ニ報告スルト共ニ之ヲ日本石油會社ニモ示シ其ノ有望ナルコトヲ力說セシガ當時ニ於テハ未ダ我當業者ヲ動カスヲ得ズシテ止ミタリ而モ本調査ハ我官民ガ北樺太油田ニ實際進出セル始ニシテ同油田史上重要ナル階梯ヲナセリ依テ當時ノ事情ヲ窺フベキ二、三ノ文書ヲ摘要スルコト左ノ如シ

明治四十五年六月十一日　海軍次官ヨリ大和艦長宛　電報

北樺太油田踏査ニ付大和艦長宛電報（明治四十五年六月）

命ニ依リ左ノ件申進ム

一、十八、九日頃大泊到着ノ豫定ナル　元北海道廳地質、鑛物調査ニ從事セシ拓殖務省技師石川貞治及其隨行者兩三名ヲ大泊ニテ便乘セシメ樺太東海岸**ツチヤイオ**（北緯約五十二度半）ニ到リ同地ニ上陸セシメ同人ノ都合ニ依リ便宜再之ヲ還送スベシ

二、同人等等ノ目的ハ**ツチヤイヲ**附近ノ石油產出狀況ヲ探知スルニアリ本件ニ關シテハ成ルベク便宜ヲ與フベシ

三、貴艦同地航行ノ件ハ露國政府ヘハ照會シアラザルニ付外間ニ對シ秘密ニナスベク若シ露國官憲又ハ露國人等ニ對シ寄港ノ目的宣明ノ必要アレバ五十度以南測量中濃霧等ノタメ豫定地ニ到ル能ハズ淡水生糧品ヲ需ムル爲寄港ノ止ヲ得ザリシトスルカ又ハ貴艦ハ豫テ測量ノ傍密獵船取締ノ訓令ヲモ受ケ居ルモノト稱シ臨肭ノ密獵日本船ヲ追躡シ荒天若ハ濃霧ニ妨ゲラレ其位置ヲ失シテ茲ニ至レルモノトスルヲ可トス

又石川一行ハ測量班ニ從ヒ五十度以南ノ地質調査ニ從事スルモノナルコトヲ以テスベシ

右寄港ノ口實ニ就テハ先方ノ疑念ヲ招カザル樣ニ其時ノ情況ニ應ジ適宜取捨スルモ差支ナシ此場合ニ於テハ事後速ニ報告スベシ

此電報ヲ一番トス　（下略）

明治四十五年六月十二日　海軍次官ヨリ大和艦長ヘ電報

本電秘密トス　昨日往電第一號ヲ以テ貴艦**ツチヤイヲ**寄港ノ件ニ關シ依命申進メ置キタル處元來**ツチヤイヲ**ハ豐富ナル石油ノ產出地トシテ聞エ既ニ淸、獨、兩國人經營ノ一會社組織サレ其本店ヲ天津ニ置キ該事業ニ從事シ居ル由聞及ビシガ其狀況ヲ探知シ置クコトハ我海軍ニ於テモ必要ナリト認メ居リタル矢先キニ今回斯業ニ經驗アリ且相當ノ信用アル石川貞治ナルモノヨリ右同樣ノ希望ヲ申出デタルニ依リ之ヲ容レ同人ヲ貴艦ニ便乘セシメ公然トナク其探知方ニ便宜ヲ與ヘシメラルルニ至リタル次第ナリ右御含ミ迄ニ申進ム此電報ヲヲ二番トス

（終）

明治四十五年七月十四日提出　軍艦大和樺太東海岸航海概要報告

七月二日晴　午前石川技師一行ヲ上陸セシム　報告ニ依レバ**カツター**ハ水路ヲ探フテ**チヤイオ**灣內ニ入リ**ギリヤーク**村落下ニ達ス時ニ石油鑛區主獨逸人**クレーエ**氏、稅關吏ト稱スル制服ヲ

着ケタル露西亞人二名短艇ニテ來會コヽニ**カツター**ニ同乘セル池中海軍大尉短艇指揮山內海軍中尉、石川技師等ト會談ス談中軍艦大和ハ海豹島附近巡航中密獵船ヲ發見追躡北航ノ處機關ニ故障ヲ生ジ淸水生糧品ニ缺乏ヲ來シタル爲寄港ス　地質調査擔當員石川技師及從者ハ石油鑛區一見ヲ得タシト申込ム**クレーエ**氏ハ快諾稅關吏モ所持品檢査ヲ行ハズ**クレーエ**氏飲料水ニアラズシテ罐水ナラバ此ノ附近ニテ六、七**トン**ヲ得ル容易ナルベク（實査スルニ之ナシ）野菜類ハナシ自分等モ既ニ五ケ月間**ボテトー**ヲモ口ニセズ云々、生魚類ハ土人ヨリ日本貨幣ニテ購買シ得ル樣計ヒ置ク云々）土人中日本語ヲ解スルモノアリ）……下略

七月七日曇　午後石川氏一行無事飯艦大泊ニ向ケ出艦ス

七月二日ヨリ七日マデ風波靜穩ナルドキ傳馬船一隻ヲ出シ本艦附近ノ測深ヲナシタルコト及水、砂生魚等ヲ得ルカ爲**カツター**ヲ三回**チヤイヲ**灣內**ギリヤーク**村落附近ニ送リタルコトノ外ハ碇泊中何等目立チタル行動ヲ執ラザリキ　（下略）

明治四十五年七月十四日兼子大和艦長ヨリ財部海軍次官ニ進達セル**チヤイオ**石油地ニ關スル件、拔萃摘要

一、乃至五項（省略）

六、獨逸人**クレーエ**氏ノ鑛區ハ諸方ニ散在シ總計四十余約百萬坪ナリト云フ目下掘井中ノモノハ**グレーエ**海峽ノ北方約七浬ニ在ル**ボアタースン**村及其北方十浬ノ**ヌトーラ**村ノ兩地ナリ**ボータースン**ニハ一號、二號、三號ノ油井アリ四號ハ目下掘穿作業中ニシテ**ヌトーオ**ニハ一號、二號ノ油井アルモ兩地共未ダ多々出油ヲ見ズ**ヌトーオ**ニテハ經驗アル技師及掘井ニ經驗アル**ガリシヤ**人等從業中ナリト云フ而シテ兩所共油井ノ口徑上部十二吋、下部五吋ニシテ二百米突乃至三百米突ノ深サニ達セルモ出水ノタメ困難ノ狀況ニアリト云フ兩所已掘五井ハ之ヲ試掘上ヨリ云ヘバ同一地層中ヲ掘穿セルヲ以テ兩地各一井ヲ有スルニ等シトノ說アリト云フ

七、右兩地共石油ノ露出地ニシテ殊ニ**ヌトーオ**ニハ瓦斯噴出井二個アリ又土語**キル**ト稱スル**ピツチ**及**アスフアルト**ヲ以テ覆ハレタル天然ノ油地四個アリ**キル**ナク石油ノミ水面ニ浮ベル池一個（長サ四百米突幅百米突）アリト云フ**アスフアルト**池ノ或者ハ其ノ上ヲ通行シ得ルモノアリ又**アスフアルト**池ノ**アスフアルト**ヲ切リ取リ其ノ穴ヨリ採油スル處二箇所アリト云フ

八、上記ノ如ク天然ノ**ピツチ**及**アスフアルト**ノ池アル如キ有樣ナレバ地下ノ藏有量ハ決シテ小額ナラザルト共ニ其ノ**アスフアルト**ヲ含有スト云フ點ヨリスル素人考モ艦船燃料トシテ良質ノ重油ナルベク目下兩地ノ狀沿頗ル振ハスト雖モ之ヲ見テ直ニ有望ナラズトスルハ當ヲ得タルモノニアラザルベシ

上部含油層ヨリ得タル重油ノ分析ハ**ベンジン**〇、四乃至〇五％ニシテ**ケロシン**ハ三十四乃至四十％ヲ含有シ臭ヨリスレバ硫黃ナキヲ證スト云フ

九、樺太島ニ於ケル石腦油ノ探險ハ今ヨリ二十四年ニ始マリ鑛山技師**クレーエ**氏ガ私人トシテ探險シタルハ十四年前ニシテ三年前ヨリ採油事業ニ着手セリト云フ而シテ油層露出ノ最モ著シキハ**ボータースン**、**ヌトーオ**及**チヤイ**灣北隣ノ**ピリタン**灣北部ナリトス東經百四十三度三分北緯五十二度ニアル**ニイ**灣中部西岸ヨリ七**キロメーター**ノ內池ニハ數多ノ天然油地アリテ**クレーエ**氏ハ東經百四十三度十分北緯五十一度三十五分ニアル**ナビル**灣ノ東岸ニモ油層露出ノ鑛區ヲ有スト云フ

一〇、含油層脈乃チ油層露出地ヲ連結セル線帶ハ樺太島ノ北端ヨリ南方北緯五十一度ニ達ス乃チ其長サ約百五十浬ニシテ幅ハ四分ノ一浬乃至二浬ノ間ニ在リト云フ

一一、目下**ボータージン**、**ヌトーオ**兩地ノ有望ナルニ拘ラズ作業振ハサルハ鑛區主ト石油會社

トノ間ニ紛擾アルモ一原因ナラン要スルニ大資本ヲ投ジ完全ナル掘井作業ヲ行ハザルニ歸スルモノト思ハル資本家ヲ奮起セシムルコト能ハザル原因トモ想ハルルモノヲ擧グレバ

(一) 交通不便ナルコト

アレキサンドルスク迄電信ノ便ナク同地マデ獨木舟及馬車ニテ旅行ニ七日間ヲ要スト云ヒ夏季ニ至ルモ定期ノ汽船便ナキコト（露國法律ノ拘束アルヤモ知レズ）

(二) 使用工夫ヲ得ルコト困難ナルコト

目下兩地ニ於テ傭使セルハ露人、支那人、朝鮮人等約百名ニシテ内七十名位勞働ニ從事セリト云フ一時支那人ハ粗食ノ結果ナルカ罹病死亡セルモノ多キコトアリシト云フ

(三) 冬期寒威酷烈ナルコト

完全ナル構造ノ家屋未ダナシト云フ（野菜類ヲ得ルコト困難ナル模様ニシテ目下壞血病ノ如キニ罹レルモノ五名アリト云フ）

(四) 最初ノ試掘法及資金使用法其ノ當ヲ得ザリシコト

(イ) 目下汽力ヲ使用シ掘井シツツアルモ最初ハ人力ノミニテ同一油層ヲ掘鑿シ出水ノ困難ヲ排除スルガ如キ充分ノ準備アラズ爲ニ出油ヲ見ルニ至ラザルニハアラザルカト想ハルルコト

(ロ) **チヤイオ**村落南方三百米外ニ二個ノ物置小屋アリ其ハ大ナルモノノ一部ハ厨房ニシテ他ハ索具類ヲ藏ス他ノ小屋ニハ**セメント**曹達、石炭等ヲ藏セリ而シテ海面上**チヤイ**灣ノ僅ニ三四尺ナル砂濱上ニ陸揚ゲサレタル儘ナル次記ノ諸材料ノ露天ニ放置シアリテ或ハ荒天吹上ゲタル海水ニ洗ハレタルモノ或ハ砂ニ埋沒スルアル等腐錆スルニ任セアルハ何故ナルベキカ獨清合同**チヤイナ**、**オイル**、**コムパニー**ノ最初ノ資本金ハ六十三萬兩ナリト云フ或ハ掘井スレバ直ニ多量ノ出油アルヲ見込タルモノ齷齪シタル爲メ乍チ一頓挫ヲ來シタルニハアラザルカ放置材料ノ重ナルモノ次ノ如シ

(1) 直經六吋長サ約三十呎厚サ四分ノ一吋ノ鐵管約四千本（兩端ニ螺線アリ油井用ニアラズシテ重油輸送用ナラン）

(2) 罐ラシキモノ二個直經六呎可長サ約五十呎

(3) 罐ラシキモノ二個箱詰ノマヽ直經約六呎長十呎可

(4) 分解機械類ラシキモノ六、七個箱詰ノマヽ（箱ノ大サ三呎四呎位）

(5) 油槽材料ラシキ鐵板數十枚角鐵材數十本荷造リノマヽ

(6) 浮漂（繫船）ラシキモノ二個
(7) 約二十噸ノ**スチームランチ**一隻破損ノマヽ陸上ニ引キ上ゲ
(8) 傳馬船大一隻鐵板製大短艇二隻
(9) 烟突材料ラシキモノ六個（直經三呎長サ約五十呎ノ鐵板製圖筒）
(10) 石炭約百噸

（附　圖　省　略）

（註）石川貞治ノ踏査報告ハ本編纂ノ際ニ遂ニ省内ニハ發見スルヲ得ザリキ、「鑛山技師**ハゲール**氏及石川貞次氏ノ樺太石油地視察報告」ナルモノアレドモ石川技師ノ報告其儘ノモノトハ認メラレズ依テ爰ニハ兼子大和艦長報告ヲ摘要記述セル次第ナリ

蓋シ右大和艦長報告ハ當事石川技師踏査直後同人ノ提供セル資料ニ基キ不取敢海軍次官ニ概報セルモノナリ

其後大正五年宮本機關少佐ハ液体燃料ニ關スル調査任務ヲ以テ英國駐在中倫敦ニ於テ露人技師等北樺太油田企業資本ニ付奔走シツツアルコトヲ聞知シ同年五月恰モ渡英セル軍令部出仕秋山

櫻井彦一郎等運動ニ着手ス（大正五年）

櫻井等海軍ニ陳情ス（大正五年六月）

海軍少將（眞之）ニ對シ我海軍ニ於テモ至急調査ノ要アル旨ヲ進言セリ

此頃日本内地ニ於テモ海軍ノ燃料問題ハ漸ク一部識者ノ關心ヲ招クニ至リアリシ折柄前記石川貞次ハ櫻井彦一郎（文士號鷗村、後北樺太石油會社取締役昭和四年沒ス）ヲ訪ヒ往年ノ調査報告ヲ提示シ之ヲ政府要路ノ參考ニ資センコトヲ乞ヘリ櫻井ハ大隈信常、押川方義等ト共ニ奔走シ伯爵大隈重信（大隈伯ハ當時首相タリ大正五年十月寺内内閣トナル）ヲ說キ又大正五年六月海軍ニ陳情書ヲ提出シ北樺太油田調査ニ着手スルタメ之ガ費用（約一萬圓）ノ助方ヲ出願セリ

海軍ハ結局右費用ノ支出ニ應ゼザリシガ同人等ハ別ノ方面ニ奔走努力シ大隈伯等ノ援助モアリシモノノ如ク漸次北樺太油田史上重要ナル活動ニ入リタルモノニシテ右海軍ヘノ陳情ハ本問題初期ノ事情ヲ窺フニ便ナルヲ以テ之ヲ次ニ摘要ス乃チ本陳情ニ於テハ先ヅ北樺太油田ノ沿革ト其有望ナルコトヲ敍シタル後

「……（前略）……石川貞治ハ札幌農學ヲ出デ拓務省ニ技師タリ後官ヲ辭シテ鑛山業ニ從事シ而シテ米資**インターナショナル**石油株式會社ヲ本邦ニ設立セラルルヤ之ニ關與シテ内地ハ勿論南樺太ニ於ケル油田ノ實査ヲナシ石油ニ關シ知識經驗ヲ有スルモノナリ

首相大隈重信ニ進言ス

其ノ北樺ニ於ケル上陸期間ハ僅カニ一週日ヲ出サリシモ稀有ノ大油田タルコトヲ確認セリザレド時未ダ到ラズシテ邦人之ガ利ヲ收ムル能ハザルヲ遺憾トセシガ今ニ到リ時運甚ダ可ナルヲ見ルヤ其ノ住地札幌ヨリ往年ノ調査報告書ヲ携ヘ來リテ余等ニ示シ之ヲ政府ノ要路ニ提出シテ其ノ參考ニ資センコトヲ乞ヘリ

余等由リテ該報告書竝ニ元支那石油顧問技師**ベハーゲル**ノ報告書譯文ヲ首相大隈伯ニ提供シ國策上該油田採掘權ヲ獲得ノ急要ナル旨ヲ述ベ其ノ賛同ヲ得タルヲ以テ爾來余等ハ其ノ方法ニ就キ頻リニ講究シ大隈伯亦爲ニ屢々海軍大臣竝ニ外務大臣ニ議スル處アリ

海軍省亦之ニ注意シ往年大和艦長ノ提出セル報告書竝ニ石川貞治ノ報告書ヲ參考トシテ研究シ更ニ日本石油會社長内藤久寛ノ意見ヲ徵シタリ、余等亦内藤久寛ノ意見ヲ求メタルニ同人ハ先ニ海軍省ヨリ質問アリタル際大和艦長ノ報告ヲ見テ寶田石油會社長橋本圭三郎ト議リ其採掘困難ナルベキヲ察シ海軍省ニ對シテハ單ニ其旨ヲ答ヘタリト語レリ余等ガ石川及**ベハーゲル**ノ報告書ヲ示スニ及ビテ内藤ハ㈠北樺太ハ再度踏査ヲナスノ價値アリト認ムト雖モ日本寶田兩會社共ニ目下踏査隊ヲ派遣スルコト能ハザルコト ㈡露國ハ日本ニ對シ反感ヲ有スルヲ以テ其政府ハ日本人ニ該油田ノ採掘ヲ許可スルコトナカルベク假令許可ストモ干渉妨害ヲ

加ヘベキコト ㈢露國**バクー**石油業者ハ北樺太油田ノ開發ガ急チ油價ニ影響スベキヲ以テ之ヲ妨害スベキコト ㈣日本石油會社等ハ内地ニ於ケル油田ニシテ猶開發セラルベキモノ殘存スルガ故ニ遠ク北樺太ニ投資スルノ要ヲ見ズ海軍省ノ自ラ臺灣油田ノ試掘ヲナサントスルサヘ之亦至難ノ業タルヲ免ガレズト認ムルコト等ノ數箇條ヲ告ゲタリ

余等更ニ露國大使館參事官**セーキン**ニ就キテ質セシニ其答以下ノ如シ 露國鑛業法ハ原則トシテ國境百**キロメートル**以内ニ在ル鑛區ヲ外國人ニ許可セズ、北樺太油田ノ所在地ハ海陸何レノ國境ヨリスルモ百**キロメートル**ニ滿タザルヲ以テ日本人ハ手ヲ下スコト能ハズ、サレド之ハ原則ニシテ中央政府ノ審議次第ニ依リテハ特典ヲ設ケラルルコトナキニアラズ、殊ニ元支那石油會社ノ例ニ倣ヒ日露資本家ガ合辨經營スルニ於テハ容易ニ採掘許可ヲ得ベシ乍然鑛業ニ關スル事務ハ凡テ中央政府ノ權限ニ屬スルヲ以テ在露日本大使館ヲ經テ照會又ハ出願ヲナスベシ又正式ニ實地踏査ヲナサントセバ先ヅ露國内閣ノ決議ヲ經テ勅裁ヲ仰ガザルヲ得ズト

之ニ依リテ觀レバ本邦人ニシテ北樺太油田ノ利權ヲ獲得セントスルニハ相當ナル人物自ラ露都ニ赴キ大使等ト議リテ豫メ露國政府ノ踏査許可ヲ受ケ然ル後實地踏査ヲナシ鑛區ヲ設定シ

テ更ニ露國政府ニ出願スベキノ順序ナリ然ルニ之ヲナスニハ多クノ時日ト少ナカラザル費用ヲ要ス

故ニ今暫ク此手續ヲ履ムコトヲ避ケ第一着手トシテ余等ハ一方明治四十五年ノ例ニ倣ヒ石川貞治ニ附スルニ學識經驗ニ富メル他ノ專門技師ヲ以テシ且ツ出來得ベクンバ海軍當局官吏一、二名ノ同行ヲ求メテ當夏期約一ケ月ノ間該油田ノ概略踏査ヲナサシメンコトヲ欲ス而シテ他方又使ヲ露都ニ送リ親シク大使等ト議セ露國政府ニ就キテ右利權獲得ニ關スル手續ヲ詳細ニ調査セシメンコトヲ欲ス以上ノ二ツハ目下執ルベキ至當ノ豫備行動ナルヲ信ズ油田ノ良否、露國政府ノ許否ニツイテハ種々ノ疑問アルベシサレド座シテ顧慮ストモ何ノ時カ能ク其ノ疑問ノ解決ヲ見ンヤ今ハ進ンデ實地ニ入リ自ラ疑問ノ氷解ヲ求ムベキ時ナリ

此ノ豫備行動ヲ執ランガ爲幸ニ海軍大臣ハ余等ニ與フルニ北海測量中ノ軍艦ニ便乘スルノ許可ヲ以テセリ露國政府トノ商議ニ關シテハ又外務當局ニ於テ十分ノ援助ヲ與フベキノ約アリ然ニ以上ノ二事ヲ遂行センニハ實費約一萬圓ヲ要スル見込ナリ余等之ガ調達ニ苦心シツツアルモ未ダ之ヲ得ズ蓋シ此問題タル未ダ世間ヲシテ周知セシムベキモノニアラズ……（中略）是レ余等ガ敢テ爰ニ海軍當局ニ對シテ資金ノ補助ヲ乞フ所以ナリトス

余等ノ熱望セル豫備行動ニシテ奏效シ油田ノ有望ナルコト判明シ露國政府ノ意向ヲ了知セラルルヲ得ンニハ內外資本家ハ蟻ノ甘キニ就クガ如ク爭フテ之ニ投資シ油田ハ自ラ有利ニ開發セラルベシ日本石油會社長ノ所謂經營困難ナルモノノ如キハ資本ト產額トノ量ニ依リ自ラ排除セラルベキモノニシテ今ニ於テ之ヲ苦慮スルノ價ナシ而シテ該油田一度開發セラレンニハ帝國海軍ノ受クル利便果シテ幾何大ナルベキヤ余等ハ帝國海軍ノ爲此時ノ速ニ到達センコトヲ切望ス

（中略）

余等更ニ天津外商ニ就テ探知スルニ支那人張某外數名ノ一財團ハ北樺太油田ヘノ投資ヲ謀ルト又聞ク倫敦ノ一財團ハ現ニ該油田企業ニ關スル調査中ナリトサレバ我國若シ此好機ニ乘シ彼ノ利權ニ對シテ先鞭ヲ着クルコトヲ怠ランカ或ハ恐ル日ナラズシテ噬臍ノ悔ヲ殘サンコトヲ若シ一度之ヲ失ハヾ國家爲ニ失フ所頗ル大ニシテ何ノ時カ之ヲ回復スルヲ得ンヤ故ニ踏査ノ擧正ニ今日ニ在リ荏苒日ヲ曠シクシテ秋季ニ及ビ北海ノ軍艦亦歸ラバ卽チ來歲ヲ期スルノ已ムヲ得サルニ至ラン而シテ其間何等カノ不利ヲ釀スコトナキヲ保セズ是ヲ以テ海軍當局冀クハ速ニ英斷ヲ下シ余等ノ志ヲ助ケテ不日實行上途セシメ以テ國家ニ貢獻スル所アラシメン

コトヲ余等ニシテ先ヅ油田踏査隊ヲ出スヲ得ンカ
次テ直ニ使ヲ露都ニ馳セシムベシ
右伏シテ陳情ス

（終）

山本、クレー石川、櫻井等ノ關係

當時海軍ハ我事業家ノ本油田ニ進出センコトヲ希望シ之ヲ日本石油株式會社ニ慫慂セシガ同社ハ大体前記櫻井等ノ陳情ニ述ベラレタル如キ理由ニヲ關與ノ意ナク機未ダ熟スルニ至ラザリキ

（註）石川ガ明治四十五年**クレー**事業地踏査後數年ヲ經テ前記ノ如ク再運動ヲ起スニ至リタルニ付テハ當時（大正五年）恰モ日露協約ノ問題世ニ傳ハリシタメ此ノ機會ヲ捕捉セントスルモノナリトノ說アリ兎ニ角櫻井等ハ斯クノ如クシテ北樺太問題ニ關係スルニ至リ一方石川自身ノ其後ノ行動ニ關シテハ多ク知ラレザルモ後年大正十年十月）山口軍需局長ガ石川ヨリ聽取セル處ニ依レド石川ガ**インターナショナル**石油會社ノ顧問時代ニ同郷ノ山本唯三郎モ同ジク札幌農學校ヲ出デ石川ノ斡旋ニテ一時**インターナショナル**石油會社ニ勤務セルコトアリ後山本ハ自ラ發展シテ天津ニ松昌注行ヲ創メタル頃、上海、天津ニ店ヲ有スル**チヤイナ**石油會社ノ**クレーエト**相識リ同社ノ樺太產油ノ販賣ニ關シ約スル處

外務省ノ調査（大正五年八月）

櫻井露都ニ至ル及其ノ任務狀況（大正五年）

アリ茲ニ山本ハ石川ニ囑シテ現地ノ實査ヲナサントシ海軍ノ援助ニ依リ之レヲ實行スルニ至レルモノナリ　其後**クレーエ**ノ事業ハ頓挫シ海軍省モ進マズ石川ハ日本石油、久原村井等有力會社ニモ說キタルガ何レモ意ノ如クナラズ遂ニ大正五年其友人安藤定次郎（大正十年十月當時北海道鑛業鐵道株式會社專務）ニ話シタル結果更ニ安藤ノ友人タル櫻井彥一郎ニ紹介セラレ櫻井ヨリ大隈伯爵ヲ動カスニ至レルモノナリト」トノコトナリ我北樺太油田史ノ最初ニ活動セル諸氏ノ因緣ヲ窺フベキ參考トシテ附記ス

又後年（大正十四年）日露條約成立スルヤ石川ハ海軍省ニ出頭陳情セルコトアリ

大正五年八月我外務省ハ在**ニコラエフスク**帝國領事ヲシテ露領樺天ニ於ケル石油ヲ日本人ニテ開發スルノ手續法規ニ關シ調査報告セシメタリ

櫻井ハ其ノ後奔走ノ結果同志ヲ代表シ大隈伯其ノ他外務、海軍等關係官憲ヨリ便宜ヲ供與セラレ大正五年十月上旬露都ニ至リ滯在約一ケ月半本野駐露大使等ノ斡旋ニ依リリ先方官民ト折衝シ北樺太油田ノ日露共同開發ニ關シ相當了解ヲ遂ゲ且ツ露國地質調査局ノ北樺太油田調査書其

他參考資料ヲ得テ歸朝セリ同年十二月櫻井ハ海軍省ヲ訪ヒ右資料ヲ示シ日露共同開發ノ要ヲ陳述セリ右櫻井ノ調査報告（拔萃）別紙ノ如ク以テ當時同人任務ノ概ヲ知ルベシ

北樺太油田ノ利權ニ關スル調査報告

櫻井彥一郎

第一　緒言

北樺太東海岸ノ油田採掘ニ關シ露國政府ノ特許ヲ受ケ得ラルベキ方法ヲ調査スルタメ予ハ大正五年十月九日ヲ以テ露都ニ赴キ滯在一ケ月半ノ間本野大使等ト議リテ之ニ從事セリ

本野大使ハ在露都露日協會理事ニシテ露英商工會議所書記長タル**ウラヂミル、サビツキー**氏ニ依囑シ各方面ニ涉リテ北樺太油田ノ利權獲得ニ關スル方法ヲ內偵セシメタリ　**サビツキー**氏ハ露國商工大臣、同次官竝ニ鑛山局長其他ト會見シテ內意ヲ探リタル上最モ適當ニシテ又最モ可能ナル方法ヲ講究シ且ツ露英商業會議所顧問辨護士**ユージン、カガン**氏ヲシテ法律上ノ手續ヲ調査セシメ報告書竝ニ意見書ヲ本野大使ニ提出セリ

予亦親シク**サビツキー、カガン**兩氏ト數度ノ會見ヲナシテ其意見ヲ徵シ質問スル所アリタリ

右兩氏ノ意見ヲ本トシ又露國地質委員會長**ボグダノウイツチ**氏及其他ノ所說ヲ參照研究シ日本人ニシテ北樺太油田其他ノ利權ヲ獲得セントスルニハ左ノ方法ニ由ルベキモノナルコトヲ確メタリ此等ノ方法ハ互ニ相俟チテ其目的ヲ達成スルモノナリ

一、日露資本家ノ合辨ヲ以テ露國ノ法律ニ遵ヒ露國內ニ日露銀行ヲ設立スルコト

二、日露銀行ハ普通銀行業ヲ營ムト同時ニ極東ニ於ケル露國領土內ノ利權ヲ獲得スルタメノ機關トナルコト

三、在露日露銀行ト異体同心ノ日露銀行ヲ東京ニ設立スルコト

四、露國政府ノ地質委員會ト聯合シテ千九百十七年五月ヨリ以降四ケ月間內ニ於テ日本地質學者ヲ北樺太油田ニ派遣シ其地質ヲ調査セシムルコト

五、以上ノ調査ニヨリ鑛區圖面ヲ得タル後直ニ日露企業家合辨シテ露國政府ニ對シ其ノ試掘ヲ出願スルコト

其ノ出願ハ日露銀行設立ノ後ヲ俟タズ　目下緊急ノ場合別途ノ運動ヲナスベキモノトス

六、試掘許可ヲ受ケタル場合ニハ日露銀行ノ變形者タル採掘會社ヲ北樺太ニ置クコト

七、日本内地ニハ別ニ一會社ヲ起シテ北樺太ノ產油ヲ凡テ買收スルコト

第二、日露銀行設立ノ必要　（省略）

第三、日露銀行ト極東露領内ノ利權　（省略）

第四、日露銀行ノ組織ト資本　（省略）

第五、日露銀行設立ノ時機　（省略）

第六、北樺太其他ノ鑛業權（省略）

第七、北樺太其他ノ鑛物　（省略）

第八、北樺太油田ヲ調査スベキ方法

地質委員會長**ボグダノウイツチ**氏曰ク　日本政府ハ何故ニ露國政府ニ對シ北樺太ノ鑛業權ヲ要求セザルカ　日本大使ニシテ盡力セバ其ノ讓受モ敢テ困難ナラザルベシト

予ハ之ニ答ヘテ曰ク鑛業權ノ讓受云々ハ外交上ノ問題ナリ予ハ寧ロ北樺太ノ富源開發ヲ以テ產業上ノ問題トナシ露國法律ノ下ニ日本人ノ資本ト勞力トヲ以テ其ノ事業ヲ遂行シ日露兩國相互ノ利益ヲ圖ランコトヲ希望ス若シ日本人ノミニシテ該地方ノ利權ヲ獲得スルコトヲ得バ甚ダ幸ナルモ今日ノ場合ニアリテハ日露合辨トスルコトニヨリテ利權ヲ獲得スルニモマタ開發ヲナ

スニモ多大ノ便利ヲ受クベシト思フト

「**ボ**」氏更ニ曰ク　日本人ノミニシテ其利權ヲ得ルコトモ余ハ左程困難ナラズト信ズ　サレド日露合辨ニ由リテ該富源ノ開發セラルルコトハ余等露國ノ當局者トシテ一層希望スル處ナリ兎ニ角日本企業家ニシテ北樺太ノ鑛業ニ從事セントスルノ希望ハ余ハ是ガ達成ノ爲出來得ル限リ助力スベシト

余ハ又「**ボ**」氏ニ對シ日本地質學者中北樺太ノ地質調査ヲナサンコトヲ希望スルモノアリト雖モ其地露國ノ領土ナルヲ以テ未ダ目的ヲ遂グルヲ得ズ如何ナル方法ニ由ラバ露國政府ハ日本學者ノ北樺太地質調査ヲ許可スベキカヲ問ヒタリ

「**ボ**」氏ハ之ニ答ヘテ其事容易ナリ　日本大使ヲ經テ内務大臣ニ出願セバ許可ヲ得ベシト云ヘリ

余ハ「**ボ**」氏ニ問フニ露國地質委員會ハ再ビ北樺太油田ノ學術調査ヲナスコトナキカヲ以テセシニ「**ボ**」氏ハ答ヘテ曰ク油田ノ調査ハ既ニ全部結了セリサレド明一九一七年五月ニハ曩ニ油田調査ヲナシタル技師ノ一人**ボレヴオイ**氏ヲ再ビ北樺太ニ派遣シテ其炭田調査ニ從事セシムベシ故ニ其際若シ日本ヨリ神保小虎博士ノ如キ著名ノ地質學者ヲ該地ニ送ランニハ卽チ**ボレヴ**

オイ技師ヲシテ其案内者タラシメ油田調査ノ便宜ヲ圖ラシムベシ

新ニ日本地質學者ノ調査ヲ俟チ露國技師ノ調査ヲ比較研究ヲナスコトヲ得バコレ實ニ露國地質學會ノ一慶事タルベシ

余ハ地質調査委員會長トシテ日本ガ神保博士ノ如キ學者ヲ北樺太ニ送ランコトヲ切望スト、余ハ由リテ「**ボ**」氏ト約スルニ明年**ポレヴオイ**氏ノ北樺太ニ赴クノ時ヲ以テ日本ヨリモ神保博士又ハ其他ノ適當ナル學者ヲ主任トスル一隊ヲ領地ニ送ランガ爲歸朝後適當ノ手段ヲ執リ可成速ニ決答ヲ與フベキコトヲ以テセリ

日本地質學者ヲ北樺太ニ派スルニハ表面在露日本大使ヲ經テ露國政府ニ協議セザルベカラズト雖モ**ボグダノウイツチ**氏ハ地質委員會長トシテ裏面ヨリ其政府ニ相談スベキコトヲ約セリ而シテ明年日本地質學者ヲ北樺太ニ派スルニハ之ヲ以テ東京地質學會ト露國地質委員會トノ聯合事業トスルヲ可トシ予ハ其趣ヲ「**ボグダノウイツチ**」氏ニ通ジ同氏モ至極贊成セリ

但シ地質委員會ガ**ポレヴオイ**氏ヲ派スルコトハ明年一月ノ豫算會議ニテ確定セラルルモノナレドモ其事ハ既ニ内定セルモノナレバ日本側ニアリテモ時機ヲ逸セザランヤウ遺漏ナキ準備ヲナスベキナリ

久原鑛業會社トノ關係開始（大正五年）

露國革命起ル（大正六年三月）

久原ト**スタヘーフ**商會トノ關係開始（大正七年五月）

第九、沿黑龍江總督ヲ訪問スルノ必要　（省略）

（終）

一方櫻井在露中同志大隈（信常）押川等ハ内地ニ在リテ相呼應シ大隈伯ノ斡旋モアリシモノノ如ク久原房之助ヲ說キテ其ノ後援ヲ得ルコトトナリ

茲ニ久原鑛業株式會社トノ關係ヲ生セリ斯クテ翌大正六年ニ入リ愈々久原側ト提携シ前記櫻井ノ報告ニ基キ日露共同事業現地調査班ノ派遣等ノ計畫ヲ進メツツアリシ處不幸同年三月露都革命勃發ノ爲一時其ノ進行ヲ阻スルルニ至レリ

而モ櫻井等ハ尙極力事態ヲ促進セントシ大正六年十月櫻井ハ久原側職員ト共ニ浦鹽ニ至リ前年露都ニ於ケル打合セニ基キ技師**ポレポイ**ト會見同技師ハ帝政時代ヨリノ有力實業家**イワン、スタヘーフ**商會ヲ推薦シ之ト久原トノ提携ニ關シ議スル處アリシガ翌大正七年五月右商會ノ總支配人**ピー、ピー、バトリン**ハ**ポレポイ**技師ヲ伴ヒテ來朝シ大隈侯爵等ノ斡旋モアリ遂ニ久原トノ間ニ北樺太油田共同開發ニ關スル協約覺書ヲ作成スルニ至レリ本覺書ハ要スルニ日露合辨組織ニ據リ油田ヲ開發セントスルノ趣旨ヲ以テ先ヅ露國商社タル**スタヘーフ**商會ヲシテ鑛業權ノ

スタヘーフ石油鑛區出願（大正七年）

獲得ニ任セシメ之ニ久原ノ出資ヲ以テ充分ナル油田調査ヲ行ヒ其結果有望ナルニ於テハ兩者共同ノ會社ヲ組織シ事業ヲ遂行セントスルモノニシテ之レ**スタヘーフ**商會ガ我北樺太油田政策實行上鑛業權者トシテ常ニ重要機微ノ關係ヲ以テ始終スルニ至レル端緒ナリトス而シテ**スタヘーフ**商會ハ此協約ニ基キ不取敢大正七年八月乃至十一月ノ間ニ東海岸**ピリツン**、**ヌトウ**、**バターシン**、**ウイニ**、**ノグリツク**、**ウイグレツグ**、**カタンクリ**、**ナビリ**ノ各地ニ渉リ總計五百三十鑛區ヲ亞港鑛務署ニ出願セリ

右久原「**ス**」協約覺書左ノ如シ

久原**スタヘーフ**契約（大正七年五月）

スタヘーフ、久原契約書（大正七、五、二十一）

覺書

露國**イワンスタヘーフ**商會（以下甲ト稱ス）ト日本國久原鑛業株式會社（以下乙ト稱ス）トノ間ニ左ノ事項ヲ契約ス

第一條　甲ハ露領樺太ニ於テ石油特許權又ハ石油鑛區ヲ獲得スルモノトス

此特許權又ハ鑛區ノ獲得ニ關スル一切ノ費用ハ甲ニ於テ負擔スルモノトス

第二條　乙ハ甲ガ第一條ニ依リ獲得シタル石油特許權區域又ハ石油鑛區ニ對シ自費ヲ以テ調査ヲナスモノトス此調査ノ爲乙ノ支出スル費用額ハ金參拾五萬圓ヲ最高限度トシ必要ニ應ジ又第三條ノ委員ノ協定ニ從ヒ順次支出スルモノトス

第三條　前條調査ノ計畫及之ニ伴フ費用額ハ甲及乙ヨリ各二名ノ委員ヲ選出シ其ノ委員會ニ於テ協定スルモノトス而シテ甲及乙ヨリ選出シタル委員ノ内各一名ハ其協定事項ヲ證スルタメ其所屬側ヲ代表シテ署名スルモノトス

（下略）

第四條　調査ノ結果第三條ノ委員會ニ於テ油業ノ經營ニ足ルモノアリト認メタルトキハ甲乙協同シテ日本又ハ露國ノ法令ニ從ヒ株式會社ヲ設立スルモノトス

第五條　第四條ニ依リ設立スベキ會社ノ資本金額ハ甲乙更ニ協定シ平等ニ出資スルモノトス

第六條　第四條ニ依リ設立スベキ會社事業ノ經營ハ甲側及乙側ヨリ各二名ノ取締役ヲ選出シ其ノ四名ヨリ成ル取締役會ニ於テ之ヲ決行スルモノトス

取締役會ノ會長ハ第四條ニ依リ設立セラルベキ會社其ノモノト同ジ國籍ヲ有スル者ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

第七條　調査ノタメ定メタル金額ハ第四條ニ依リ設立スベキ會社ニ對スル乙ノ出資額中ニ充當スルモノトシ又甲ノ獲得セシ石油特許權又ハ石油鑛區權ノ價格モ之ト同一ノモノト見積リ共ニ同會社ノ資本中ニ出資セラルベキ双方ノ出資額中ニ算入スルモノトス

第八條　調査ノ結果第二條ニ依リ決定シタル費用ノ全部ヲ消費スル以前ニ第三條ノ委員會ニ於テ第一條ノ石油特許區域又ハ石油鑛區ガ事業經營ノ見込ナシト決定シタル時ハ其殘額ハ乙ニ於テ支出ノ義務ヲ免ルルモノトス但シ第四條ニ依リ會社ノ設立セラルル場合ニハ其殘額ハ同會社ノ資本金額中ニ出資セラルベキモノトス

第九條　調査中第三條ノ委員會ニ於テ更ニ調査スルタメ第二條ニ定ムル最高額ヲ超ヘテ支出スルノ必要アリト認メタル時ハ其增加額ハ甲乙各其半額ヲ負擔スルモノトス

第十條　本契約ノ有効期間ハ四箇年トシ甲乙更ニ協議ノ上延長シ得ルモノトス但シ期間中ト雖第八條ニ依リ事業經營ノ見込ナキニ至リタルトキハ本協約ハ當然無効ニ歸スルモノトス

第十一條　（省略）

第十二條　甲乙ノ內何レカヾ調査ヲ繼續スルコト又ハ會社ヲ設立スルコトヲ拒絕シタル時ハ其一方ハ事業ノ繼續ヲ希望スル相手方ニ對シ其權利ヲ無償ニテ讓渡シ又ハ放棄スルモノトス卽

甲ガ拒絕シタルトキハ甲ノ有スル第一條ノ石油特許權又ハ石油鑛區ヲ無償ニテ乙ニ讓渡シ又乙ガ拒絕シタルトキハ乙ガ本契約ニ依リ得タル調査上ノ權利ヲ甲ノ爲ニ拋棄スルモノトス

前項ニ依リ甲又ハ乙ガ取得シタル權利ノ全部又ハ一部ハ讓渡者ノ承諾ナクシテ之ヲ第三者ニ讓渡シ得ザルモノトス

第十三條　甲又ハ乙ガ獲得シタル權利ノ移轉ハ相手方ノ承諾ヲ要スルモノトス

第十四條　本契約ハ甲及乙ノ好意ニ基キ成立シタルモノナルガ故ニ本協約ノ目的ヲ達スルコト及第四條ニ依リ設立シタル會社ノ日露兩國ニ於ケル利益ヲ防衞スルタメニ互ニ誠意ヲ以テ最善ノ方法ヲ講究スルモノトス

第十五條（省略）

（終）

（註）

一、大隈侯爵（重信）ハ右**バトーリン**ノ來朝當時數次彼ヲ引見シ日露共同ニ付說ケルモノノ如ク彼ノ本邦ヲ辭スルニ當リ兩者間ニ交換セラレタル文書ノ如キモ其ノ一端ヲ窺フニ足ルベキヲ以テ參考ノタメ左ニ之ヲ揭グ

スダヘーフ商會ノバトーリン氏ヨリ大隈侯爵宛書面

尊敬スル大隈侯爵閣下

閣下ノ予ニ對シテ與ヘラレタル御優遇ヲ衷心ヨリ感謝スルノ光榮ヲ有シ候

侯爵閣下ニ於テハ拜顏ノ當初既ニ予ノ苦惱セル精神ヲ御了解相成リタルコトト存申候露西亞ハ今ヤ予ニシテ同國ヲ代表シテ語ラシト欲スルモ得ザルノ狀態ニアリト雖モ亦同時ニ意味深キ隱忍耐苦ノ露西亞ノ尙存スルアルヲ以テ予ハ其名ニ於テ一言スルノ權能ナキニシモアラスト存申候

露西亞トハ果シテ何者ナリヤ、彼ハ現時ニアリテハ奈落ノ淵ニ病ミ且ツ憊レタリト雖モ其千年ノ歷史ヲ演ジ出シタル源泉ニ於テ此ノ苦痛ヨリ漸次ニ而モ確實ニ復生シツツアルモノニ候然ラバ予ノ何爲ゾ貴邦ニ來リシヤト問ハルルナランニハ予ハ之ガ答トシテ以下ノ如ク可申候

卽チ我國民ハ將來必ズヤ貴國民ト提携活動セザルベカラザル事、相互ニ活動セバ其活動ノ一層有効ナルベキコト　而モ貴國民ガ露國民ノ根本ト關係スルコトナク唯眞ニ孤立單獨ニ活動スル場合ニハ其結果ノ良好ナラザルコト　此等ヲ認ムルガ故ニ至情ヨリ發スル熱烈ナル決心ヲ以テ爰ニ活動センガ爲ニ來朝シタルモノニ御座候　予ハ露國民ノ根底ヨリ出デテ貴邦ニ來リ申候　良否ハ別問題トシテ予ハ終始斯ノ人民ト共ニ在リ　又斯ノ人民トノミ共ニ活動シ居リタルモノニ候　予ガ日本ニ在ルノ日ハ淺シト雖モ既ニ其有力者ト交際スルノ幸福ヲ得而シテ尙一層貴國民ニ接近シ其ノ如何ニ生活スルカ如何ニ勞動スルカ如何ニ信ズルカ又其大多數者ノ如何ニ自己ヲ觀ズルカヲ知ルヲ得ンコトヲ欲シ候予ハ以上ノ希望ヲ悉ク成就シタリトハ信ゼザルモ予ハ日本國民ノ高尙ナル德義的勢力及ビ其根本的趨向ヲ幾分了解シタリト信ジ而シテ日露ノ共同起業ハ恰モ貴國民ノ快事トスルトコロナルヲ見テ其ノ結果ノ必ズ豐富ナルベキヲ信ジ申候蓋シ斯ノ如キ國民的根底ニ築カレタル事業ハ進歩的ニシテ最モ有望ナルベシト存申候

（中略）

日本ノ新聞雜誌ハ予ニ對シテ高キ名譽ヲ與ヘ予ヲ紹介シ予ノ志望ノ所在ヲモ明カニ致申候思フニ或ル日本人ハ將來予ノ故鄕ヲ訪ハルルコトアルベク　然ラバ其人ハ予ノ生涯歩ミシ途ニ分ケ入ルヲ得ベク候

露國ハ現時混亂中ニアレドモ其ノ眞面目ナル根底ハ存在致居候予ハ之ヲ以テ貴國民ニ告グルコトヲ最モ重要ナル意味アルベシト信ジテ此國ニ來レルモノニ候

予ガ共同ノ思想ヲ抱キテ貴國ニ來レル事ハ尚廣ク尚深ク日本ト露國トヲ結合シテ良友タラシムルニ足ルベキ經濟的關係ヲ作ランガ爲ニ御座候閣下ガ以上ノ事業ヲ信ジテ一層高價ニ評價セラレ其成功ヲ信ゼラルルコト予ト等シカルベキヲ疑ハザルモノニ御座候

擱筆ニ臨ミ閣下ノ御健康ヲ祝シ申候

一九一八年七月二日於東京

敬具

眞實ニ閣下ヲ尊敬スル　ピー、ピー、バトーリン

右ニ對シ大隈侯回答

貴翰拜受仕候貴下ハ此度ノ來朝ニ際シ屢々予ヲ訪問セラレ日露ノ現在關係ニツキ相互意見ノ交換ヲナスヲ得タルハ余ノ喜トスル處ニ御座候

余ハ貴下ガ進歩的ニシテ且ツ健實ナル事業的精神ニ富ミ快活ニシテ敢爲ノ氣象ニ充チ眞理ヲ語リテ恐レズ直情往行以テ其ノ宏大ナル事業ヲ經營シツツアルニ敬服致候

貴下ハ露國大多數ノ人民タル農民階級ヨリ出デテ露國實業界ノ大勢力トナレルヲ聞キテ尚更敬服ノ念ニ堪ヘザルモノニ候

日本ノ格言ニ農ハ國ノ本ナリト云ヘリ　貴下ハ露國ノ根本タル純露思想ト其ノ情感トヲ抱キ其ノ現ハルル所、熱烈ナル愛國心トナリ此ノ精神ハ能ク貴國民ヲ指導シテ今ノ憂フベキ狀態ニアル露國ヲ救濟スルニ資スベキハ余ノ疑ヲ容レザル所ニ有之候

貴下ノ日露合辨ニ對スル志望ハ全ク余ノ素志ト合致スルモノニ候貴下短時日ノ滯留中十分ニ其ノ目的ヲ遂グル能ハザルハ余ノ甚ダ遺憾トスル所ナレドモ蓋シ羅馬ハ一日ニシテ成ラズ事ヲ成スニ機アリ機克ク熟セバ事自ラ成ルベク候

貴下ハ既ニ合辨ノ種子ヲ蒔キタリ近キ將來必ズヤ收獲ノ日ハ到ルベク余ハ貴下ノ蒔キタル種子ノ成育ヲ助クルタメ一臂ノ勞ヲ辭セザルベク候貴下世界漫遊ヲ了ヘテ歸國ノ途ニ就クノ時來リテ再ビ日本ノ老友ヲ訪ハンコトヲ期待致候

一路平安ヲ祈リ申候

一九一八年七月六日

大隈重信

（註）

二、後年大正九年八月陸軍大臣室ニ於ケル大井包高（本野外相ノ知遇ヲ受ケ露都大學ヲ卒業

スタヘーフ商會及バト

ーリンニ付テ

シ歐亞貿易商會ヲ經營セリ）談ニ依レバ**スタヘーフ**商會ハ（Iuan Stakhoieff & Co）戰前ノ露貨五十億**ルーブル**ノ合資會社ニシテ**バトーリン**ハ其ノ實權者ナリ其經營ニ係ル事業ハ銀行、私有鐵道、棉花栽培及紡織穀類、運輸、船舶、鑛山、石油、漁業、森林、**パルプ**及製紙、出版、電信等ノ各方面ニ亘レリ　現在露國ハ大動亂ノ渦中ニアリト雖モ**スターヘーフ**商會ノミハ獨リ其事業ヲ中止セズ敏活ニ行動セルハ實ニ**バトーリン**ガ過激派ノ頭目ト親善ニシテ大ニ尊重セラルルニ由ル**バトーリン**ハ大正七年我國ニ渡來シ二ケ月間滯在シ朝野ノ名士ト會談シテ意志ノ疎通ヲ謀リタル後去ツテ米國ニ赴キ同國實業家**モルガン**、**ロツクフエラー**、**フオード**等ト共ニ**ピープルインダストリアルトレーチング**會社ヲ創立セルガ今ハ佛國ニ在リテ故國ノ形勢ヲ觀望シツツ**スタヘーツ**商會ノ各事業ヲ指揮セリ

露國故情險惡、勞農政府樹立、內田駐露大使引揚（大正七年二月）

（終）

然ルニ一方露國政情ハ容易ニ安定セズ前年（大正六年）革命後成立セル**ケレンスキー**內閣ハ同年十一月ヲ以テ倒レ勞農政府樹立セラルルヤ突如中歐諸國ト休戰ヲ約シ極端ナル社會主義政策ノ實行ニ着手セリ是ニ於テ國內大ニ亂レ**シベリア**方面亦過激派ノ跳梁スル處トナレリ乃チ大正七年一月帝國政府ハ軍艦（第五戰隊石見朝日）ヲ浦鹽ニ派シ又翌二月ニハ露都危急ノタメ內田大使ノ引揚ヲ見ルニ至レリ

日英陸戰隊浦鹽ニ上陸ス（大正七年四月）

斯ノ如クシテ東部**シベリア**ノ情勢モ益々切迫シ遂ニ大正七年四月日英兩國ハ陸戰隊ヲ浦鹽ニ上陸セシメタリ

海軍進デ北樺太油田調査ノ方針ヲ執ル（大正七年三月）

海軍ハ大正五年以來邦人ニ依ル北樺太油田開發ヲ希望シ已ニ櫻井等ノ運動ニ對シテモ支援ヲ與ヘ又本問題ニ久原ノ關與スルコトニ就テモ之ヲ認メ且相當期待スル處アリシガ前記ノ如ク露國政變以來ノ時局ノ推移ヲ考慮シ此際海軍自ラ進ンデ機ヲ捉ヘ同地油田ヲ調査シ以テ邦人ノ企業ヲ誘導シ現地ニ優先ノ地歩ヲ植エ付クルノ得策ナルヲ認メ大正七年三月加藤海軍大臣ハ中野艦政局長ノ左記提案ヲ決裁シ茲ニ海軍トシテノ積極方針ヲ決スルニ至レリ

仰　裁

大正七、三、七　官房機密第三三一號決裁

露領樺太東海岸油田ニ關シテハ其油兆ノ豐富ナルト其地域ノ廣濶ナルト何レモ大油田ノ素質ヲ具フルモノトシテ夙ニ民間業者ノ注目怠ラザルトコロナルモ露領鑛業權ノ獲得困難ナルト且ハ露國政變ノ爲空シク探險ヲ躊躇スルノ狀況ニ在リ然ルニ最近ノ形勢ニ依レバ自然相當ナル時機

ノ到來ヲ期シ得ベシト認ムルニ依リ今後時局ノ發展ニ順應シ適當ナル最近ノ機會ニ於テ先ヅ同地油田ヲ軍事的ニ實査セシメ後日ニ對スル優先ノ地歩ヲ獲得スル目的ヲ以テ海軍省ヨリ一名、農商務省又ハ帝國大學等ヨリ專門家若干名ヲ撰ミ油田調査ヲ實行スルノ方針ヲ執ラレ可然哉

右仰高裁

海軍ハ久原スタヘーフノ協同ヲ支持シ且之ヲ督勵シ久原調査隊ノ派遣ヲ見ルニ至ル（大正七年）

而シテ民間側企業ニ付テハ之レヲ統一指導スルノ必要ヲ考ヘ將ニ畫策ヲ進メツツアル前記久原**スタヘーフ**團ヲ支援スルノ方針ヲ執リシガ久原側ハ初メ本企業ニ種々危惧ノ念ヲ抱キ櫻井等ノ熱心ナル說得ニ不拘積極的進出ヲ躊躇シツツアリ乃チ海軍ヨリハ山口少將宮本機關中佐等交々久原ノ幹部其他ト折衝シ極力之ヲ督勵スル處アリ幾多曲折ヲ經テ兎モ角モ大正七年四月久原調査隊ノ現地派遣トナリ又一方ニハ前記ノ如ク久原**スタヘーフ**ニ依ル日露提携ノ實現ヲ見ルニ至レルモノニシテ之等ノ進展ニ關シテハ久原側ニ於テハ櫻井及田邊（勉吉）ノ活動ニ依ル處多シト認メラレタリ

右久原ノ調査隊ハ元敷香支廳長成富道正ヲ首班トシ地質技師日下部全隆測量技師內藤梅太郎、通譯梨木祐臣等ヲ幹部トシ大正七年夏亞港ヨリ**ツイミ**川ヲ下リ**ルンスキー**、**ナビリスキー**、**チ**

帝國**シベリア**出兵宣言（大正七年八月）

ヤイスキー油田地帶ヲ調査シ同年秋歸朝セシガ間モナク日下部技師病ニ斃レ遂ニ調査報告ヲ完成スルニ至ラザリキ時ニ**シベリア**方面ニ在テハ既ニ記セルガ如ク革命後ノ情勢ニ鑑ミ大正七年四月日英陸戰隊ノ浦鹽上陸ヲ見ルニ至リシガ其後**チエツクスロヴアツク**軍ノ反過激派運動ヲ機トシ白系露軍所在ニ起リタルモ彼等ノ戰ハ概ネ利アラズ此儘ニテハ遂ニ東部**シベリア**一帶モ過激派ノ勢力ニ歸スルノ憂アリ形勢大ニ切迫セルヲ以テ同年八月帝國ハ遂ニ**シベリア**出兵ヲ宣言シ**チエツク**軍援助ノ名ヲ以テ先ヅ我第十二師團浦鹽ニ上陸シ英、米、伊、支等各國亦出兵セリ而シテ我海軍ニ在テハ第三艦隊ノ殆ド全部露領沿岸ニ出動同年九月我陸戰隊ハ尼港ニ上陸シ赤衞軍ノ武裝ヲ解除セリ

此ノ間我海軍ハ又前記大正七年三月決裁ニ據ル北樺太油田調査隊ノ派遣ヲ期シ時局ノ推移ニ留意セルモ未ダ其機ヲ得ズシテ空シク夏期ヲ經過シツツアリシガ偶々同年九月在尼港石田領事ハ黑龍江下流**ニコライエフスク**對岸**ヴツセ**附近ニ石油ノ湧出アル趣ヲ報ジ當時**シベリア**ヨリ歸京セル田中海軍少將（耕太郎）亦之レヲ當局ニ報告セリ卽チ海軍大臣ハ左記艦政局提案ヲ決裁シ之レガ實査ノ爲直ニ宮本機關中佐ヲ派遣シ且ツ農商務省技師山根新次同技手中川藤太ヲ海軍省囑託トシテ之ニ同行セシメタリ

宮本機關中佐**オハ**油田探險（大正七年十月）

大正七年九月十一日　官房機密第三三一號ノ二決裁

露領樺太東海岸油田ノ調査ニ關シテハ曩ニ官房機密第三三一號ヲ以テ決裁相成リタル次第モ有之タル處更ニ露領**ニコラエフスク**南東灣**ヴツセ**ニ於テ石油露頭ヲ發見シ既ニ在**ニコラエフスク**領事館ニ於テハ邦人ヲシテ流出中ノ石油標品ヲ採取シ東京ニ送附シ分析ニ付シタル趣ニ就テハ差當リ同地方面策動中ノ海軍艦船燃料ニ供用等ノ名義ニ依リ時局ノ進展ト共ニ油源ノ開發ニ干與スベク優先ノ地歩ヲ占ムルノ目的ヲ以テ此際先以テ海軍省艦政局ヨリ高等武官一名能商務省ヨリ技師一名ヲ來ル十六日頃舞鶴發ノ勞山便ニテ簡派シ實地踏査ヲナサシメラレ可然哉

右仰高裁

（終）

此出張ニ當リ艦政局當事者ハ豫メ農商務省地質調査所ノ所見ヲ徵シ右**ヴツセ**油田ノ報ハ遽カニ信ジガタキモノト判斷セルモ寧ロ此際進ンデ北樺太北部油田探險ノ機會ヲ得ンコトヲ考慮シ宮本機關中佐モ内々此旨ヲ体シ九月下旬先ヅ尼港ニ到着實地調査ノ結果果シテ**ヴツセ**ニ關スル報道ノ誤リナル事ヲ明カニセルヲ以テ同官ハ更メテ**オハ**油田探險ノ儀ヲ本省ニ電申許可ヲ得恰モ尼港方面ニ在リタル我海軍部隊及在留官民ノ援助ニ依リ急遽調査隊ヲ編制シ荒天ヲ冒シテ北樺太ニ渡リ同島ヲ横斷シテ十月一日**オハ**ノ舊**ゾートフ**鑛業地ニ達セリ爰ニ初メテ邦人未到ノ同油田ヲ探險踏査シ其ノ大ニ有望ナルヲ確メ同月中旬歸省同地出油ノ見本ト共ニ具ニ之レヲ海軍大臣ニ報告セリ尚ホ囑託山根技師中川技手等ハ**オハ**探險ニハ參加セズ**ヴツセ**調査後尼港ヨリ亞港ニ至リ同地附近炭坑（**ポロビンカ**炭鑛、**アレキサンドロフスキ**炭鑛**ロカツイ**炭鑛）等ヲ調査歸京セリ（宮本機關中佐**オハ**探險ニ關シテハ第七章　同官手記參照）

（註）

從來露領樺太油田ニ關シテハ既ニ相當露國側ノ文獻モアリ就中南方油田ニ付テハ曩キニ石川貞治最近ニハ久原調査隊ノ派遣アリ逐次調査ノ歩ヲ進メツツアリシニハ相違ナカリシモ事業場危險率多キコト及露國政情不安定等諸種ノ事情ニ制セラレ前記久原**スタヘーフ**商會提携ニ依ル企業團ノ如キモ態度消極的ニシテ何レノ日ニ克ク充分ノ調査ニ着手シ得ベキヤ甚ダ心元ナキ實情ニ在リキ此ノ時ニ當リ海軍當局職員ノ自ラ敢行セル右**オハ**油田ノ探險踏査ハ之ニ依リ著シク北樺太油田ニ關スル認識ト期待ヲ深メ本問題ニ對スル海軍ノ態度ヲ愈々強化セシメタルト同時ニ大ニ民間事業家ノ關心ヲ誘フニ至レルモノニシテ北樺太油田史

オムスク政府成立（大正七年十一月）

邦人ノ運動統制等ニ付宮本機關中佐ヲ浦鹽ニ派遣ス（大正七年十一月）

上特筆スベキ事績ト認メラル

時ニ（大正七年十月）我陸軍ハ既ニ**イルクツク**ニ進ミ十一月**コルチヤツク**海軍中將ヲ首班トスル**オムスク**政府成立シ極東ノ政情稍安定ニ趨カントス而シテ此間北樺太、西比利亞方面ニ於テハ我大倉組派遣員尼港在留島田元太郎亞港在留高村權次郎等邦人ノ利權運動盛ニシテ就中前記海軍職員ノ探險ニ依リ**オハ**油田ノ大ニ有望ナルヲ知ラルルヤ大倉組ト島田ハ相携テ之ガ利權ヲ得ンコトヲ企テヤヤモスレバ我國ノ對北樺太企業ノ統制ヲ害シ海軍ノ指導シツツアル久原**スタヘーフ**共同事業ニ累ヲ及ボスノ憂アリ乃チ海軍ハ之等油田ニ關スル大小ノ運動ヲ統制指導スルタメ山口少將、宮本機關中佐等ヲ尼港及**ハバロフスク**方面ニ派遣スルコトトセルガ其ノ出發ニ先チ冬季交通杜絶其他ノ事情ノ爲止ヲ得ズ之ヲ見合セ十一月下旬不取敢宮本機關中佐ヲ浦鹽ニ派シ同方面ニ於テ出來ル丈ケ之等ノ問題ニ善處セシムルコトトセリ

同官ハ浦鹽ニ於テ久原側ヨリ派遣セル櫻井、成富等ヲ後援シテ久原**スタヘーフ**利權ノ確認ニ關シ沿里龍竝**サハレン**州鑛山監督署トノ交渉及北樺太油田、炭田利權運動ノ統制等ニ關シ畫策同年十二月下旬歸省セリ

斯テ翌大正八年一月艦政當局ハ今年コソ海軍調査隊ノ派遣ヲ斷行セラレンコトヲ欲シ之ニ關シ

別紙ノ通海軍大臣ノ決裁ヲ經タリ

仰裁

大正八、一、二七　官房機密第八七號決裁

露領樺太東海岸石油地帶ノ實地踏査ニ關シテハ既ニ客年三月七日官房機密第三三一號ヲ以テ決裁ヲ經タルモ當時時局ノ形勢之ガ決行ニ便ナラザルヲ以テ遂ニ實施ノ運ニ至ラザリシハ深ク遺憾トスル所ナリ聞クトコロニ依レバ其後同方面一般狀態ノ開展ニ伴ヒ我企業者中ニモ露人ト相當ナル協商ヲナシ之ガ調査ヲ行フコトニ關シ案畫中ノモノアル趣ナルモ由來海軍燃料油ノ解決ハ海軍ニ於ケル絶對ノ問題ナルヲ以テ是等重大ナル問題ヲ擧ゲテ單ニ營利ヲ目的トスル一、二企業者ノ計畫ニ委シ安閑トシテ其ノ結果ヲ待ツコト能ハザルハ勿論若シ荏苒トシテ時日ヲ經過シ遂ニ其時機ヲ失フニ至ラバ好機再ビ得難キヲ虞ル依テ要スレバ前記企業等ニモ相當交渉シ來四月融雪ノ候ヲ待テ大体別紙方案ニヨリ軍事上ノ見地ニ於テ根本的ニ油田ノ眞價ヲ調査セシメラレ可然哉

右仰高裁

左　記

一、調査班ハ三班トシ各班石油鑛業竝石油地質ノ專門技師ニ必要ナル測量技手助手人夫ヲ附屬セシム

二、農商務技師技手若クハ適當ト認ムル民間技師技手若干ヲ海軍省囑託トス

三、調査區域ヲ三分シ各班其一ヲ分擔シ本年十月中旬マデニ大体ノ作業ヲ終了スルモノトス

四、調査隊員ノ往復交通及糧食需品作業用具等ノ運搬ニ關シテハ出來得ル限リ海軍測量船又ハ特務船船腹利用ノ便宜ヲ與フルコト

五、調査費ハ大体六萬圓ノ範圍トシ臨時軍事費艦營費支辨トス

經費見積書添（省略）

（註）

北樺太油田ニ關シテハ大正七年夏三菱合資會社今井技師等ニ依リ調査セラレ又同十月ニハ前記ノ如ク海軍省囑託山根農商務技師之ヲ調査シ且ツ當時驅逐艦海風ノロガツイ炭使用報告其他海軍ニ於ケル調査ニヨリ相當有望ナルコトヲ確メラレタリ而シテスタヘーフ商會ハ既ニ帝政時代ヨリ之等炭田ニ着目シ其實力ト信用トニ由リ多クノ鑛區ヲ所有シアリ一方我邦人ノ利權運動亦少カラズ由テ海軍ハ此際之等個個ノ運動ヲ排シ石油事業ニ於ケルガ如ク我有力實業家トスダヘーフ商會トノ提携ヲ希望セル次第ニシテ曩ニ大正七年パトーリン來朝ニ當リ久原トノ間ニ石炭ニ付テモ商議セラレ成立ニ至ラザリシモノナルガ其後曲折ヲ經

北樺太利權ニ付外人ノ活動ヲ報セラル（大正八年）

テ同年末三菱ト**スタヘーフ**商會間ニ炭田調査ニ關スル協約成立ヲ見タリ本協約ハ要スルニ**スタヘーフ**ハ鑛業權ヲ三菱ハ資金ヲ提供シテ共同調査ヲ進メントスルモノニシテ爾後同地炭山事業ノ基礎トナレルモノナリ

而シテ久原、三菱間ニハ北樺太石油、石炭事業ニ付提携ノ了解進行スルニ至レリ

然ルニ當時露國領土ニ於ケル外國資本家ノ利權運動漸ク盛ニシテ就中極東ニ活動セル米國資本團（主トシテ**アメリカントレーヂングコンパニー**及**カナデアンマイニングコンパニー**）等ガ我ニ對抗シテ北樺太鑛業權、亞港築港權等ニ關シ**オムスク**政府ニ運動セルヤノ情報アリ帝國政府ハ同地油田事業ニ重大ノ關心ヲ有スルノミナラズ之等接壤ノ地ニ外人ノ足溜ヲ作ルガ如キハ軍事上ヨリシテモ絶對ニ容認シガタキコトナルガ故ニ同地ノ利權ハ是非共日露人ニ限リ經營セシムル樣指導セザルベカラズ此ノ主義ヨリシテ已ニ成立セル久原**スタヘーフ**合同事業ノ如キハ特ニ相當援助ヲ與ヘテ促進スルノ要アリ

又一方引續キ邦人事業家等ノ利權運動モアリ當時ノ安定ナキ露國政權ニ對シ此際區々ノ運動ヲナサシムル如キハ徒ニ内訌ヲ釀シ大局上不利ヲ招クニ至ルベキヲ以テ之ヲ一團トシテ統制スルノ必要アリト認メラレ茲ニ海軍ノ提案ニ基キ大正八年四月一日閣議ヲ以テ露領北樺太企業ニ關

北樺太問題ニ付帝國ノ方針決定（閣議）（大正八年四月）

シ帝國ノ大方針ヲ決定セラルルニ至レリ之北樺太油田炭田問題ニ關スル閣議決定ノ始ナリ

大正八、四、一　閣議決定覺書

露領北樺太ニ於ケル企業ニ關スル件

露領北樺太ニ於ケル油田、炭田ノ開發ニ就テハ本邦實業家ト露國實業家トノ間ニ共同經營ニ關スル相當協約成立シ目下各種調査ノ歩ヲ進メツツアリ其ノ眞價如何ハ素リ精査ノ結果ニ俟タザルベカラザルモ帝國トシテ現ニ絶對ニ必要ナル艦艇、飛行機、自動車及漁業用等ノ燃料供給問題ノ解決上北樺太油田及炭田ノ開發ニ對シテハ帝國政府トシテ深甚ノ注意ヲ要スル次第ナリ

然ル處最近聞知スル處ニ依レバ米國某々油業會社ハ**オムスク**政府ヲ擁シテ露領北樺太ニ投資ヲ試ミントスト言フ將又近來喧傳セラルル北樺太築港問題ノ如キ何レモ其背後ニ米國資本家ノ活動アルヤノ疑ナキ能ハズ敍上ノ如ク米國ノ大資本ガ北樺太ニ投ゼラルル事ハ直接同地方ニ於ケル石油及石炭ノ企業ノ米國ノ掌裡ニ壟斷セラルルノ結果ヲ生ジ前途燃料問題ニ對シ堪ユベカラザルノ打擊ヲ與フルノミナラズ延テ米國ノ勢力ヲ同地方ニ固着的ニ扶殖スルコトトナルベク斯ノ如キハ其名義ノ如何ニ拘ラズ帝國ノ國防ニ對スル重大ナル脅威ニシテ帝國ノ存立上到底許容

スル能ハザ所ナリトス

仍テ本件ニ關シ帝國政府ハ速ニ左記方針ヲ確立シ且之ガ實行ノ途ヲ講ズルヲ緊要ト認ム

一、露領北樺太ニ於ケル油田、炭田ノ經營及其他ノ固定的企業ニ關シテハ日露共同ノ經營若ハ我資本ニ據ルコトトシ日露以外ノ資本ヲ入レザルノ主義ヲ**オムスク**政府ヲシテ認メシムルノ手段ヲ執ルコト

二、右企業ニ對シテハ本邦企業家ハ能ク協同一致シ互ニ相訌クガ如キコトナキ樣相當ノ方法ヲ講ズルコト

三、露領北樺太ニ於ケル油田及炭田ノ經營ニ關シテハ帝國政府ハ相當援助及奬勵ノ手段ヲ講ズルコト

（終）

爾後右閣議方針ニ基キ海軍省ヲ中心ニ關係各省當局間ニ會議ヲナシ着々實施ノ歩ヲ進ムルコトトナレリ

次デ翌五月**シベリア**政情ノ推移ハ**オムスク**政權ニ對シ承認ヲ與フルノ時機近カカルベキヲ想ハシムルニ至レルヲ以テ更ニ具体的方策ニ關シ左ノ通閣議決定ヲ見タリ

北樺太利權ニ關シ**オムスク**政權ニ對スル方針ヲ定ム（大正八年五月）

大正八年五月二十四日　閣議決定

露領樺太ニ於ケル企業ニ關スル件

同一問題ニ關シ本年四月一日其大体方針ニ付御同意ヲ得タル處今ヤ帝國ガ**オムスク**政權ヲ承認スルノ機運漸ク熟セルニ付テハ此機會ニ於テ本件ニ關シ一層具体的ニ地歩ヲ確定スル爲左記方針ヲ定メ本件ヲ進捗致度

記

一、帝國ガ**オムスク**政府ヲ承認シ諸般ノ援助ヲ與ヘラルル時期ニ到達セバ適當ノ機會ニ於テ同政府ヲシテ帝國政府若ハ帝國臣民ノ露領樺太ニ於ケル油田及炭鑛開發ニ關スル優先權ヲ認メシムルコト

二、若シ**オムスク**政府ガ右油田炭鑛ノ開發ヲ政府若ハ露國人ニ依テ經營スルコトニ定メタル場合外國ノ協同企業ヲ要スルトキハ先ヅ以テ帝國政府ニ合議スベキコトヲ承認セシムルコト

三、油田炭鑛ノ開發ニ伴ヒ其ノ輸出基地トナルベキ港灣ノ修築竝陸上ニ於ケル輸送機關ノ構設ニ關シテモ前二項ノ主義ヲ認メシムルコト

（終）

海軍ハ久原ト日石寶田及大倉組ノ提携ヲ指導ス（大正八年）

北辰會成立シ久原スタヘーフ協約ヲ繼承ス（大正八年五月）

斯ノ如ク北樺太企業ニ對スル帝國ノ態度ハ海軍ノ發動ニ由リ着々決定セラルルニ至リシガ此間海軍ハ久原スタヘーフ協同團ノ事業發展ニ關シ深甚ノ考慮ヲ拂ヘリ

蓋シ前起ノ如ク久原ハ外スタヘーフ商會トノ間ニ兎モ角日露共同ノ形ヲ作リ又内ニハ三菱トノ間ニ事業提携ノ諒解ニ達シタルモ前年（大正七年）派遣セル日下部技師等調査ノ結果及露國政情ニ伴フ鑛業權ノ將來ニ對スル不安等幾多ノ事情ヲ顧慮シテ進出ヲ躊躇スルモノノ如ク此儘ニテハ折角ノ久原スタヘーフ協約ニ據ル調査事業モ容易ニ其進展ヲ期待シガタキニ觀察セラレタリ是ニ於テ艦政局當務者タル山口少將等ハ大正八年初頭ノ頃ヨリ先ヅ頻繁ニ久原側幹部ト面接之ヲ激勵シ且ツ本事業ノ遂行ヲ完カラシムル爲斯業ニ經驗アル日石、寶田兩石油會社トノ提携ヲ慫慂斡旋セル結果漸ク同年三月久原側モ之レヲ諒シスタヘーフ側ト協議シ夏期ヲ待ツテ地質調査隊ノ派遣ヲ計畫スルト共ニ一面日、寶、兩社トノ間ニ協同ノ商議ニ着手スルニ至レリ

然ルニ豫テ尼港方面ニ於テオハ油田ノ利權運動ニ活躍シツツアリシ大倉組モ之ト前後シテ其事業上自ラ日、寶、兩社トノ提携ヲ策シ海軍ニモ其ノ意志ヲ通ズルニ至レリ

元來此オハ油田ハスタヘーフ商會出願ノ鑛區以外ナルモ既ニ述ブルガ如ク最モ有望ニシテ當時久原側ニ於テモ主ニ此地ニ着目シアリシ折柄海軍ハ之等大倉組ノ運動ニ依リ事業ノ統一ヲ害センコトヲ憂ヘ關係者ヲ說得シテ相協同セシムルコトトシ更ニ曩ニ北樺太鑛業ニ付久原ト提携セル三菱ヲ併セ茲ニ北樺太油田企業ノ意圖ト實力ヲ有スル五大會社ヲ統合シ大正八年五月初テ北辰會ナル一企業團ヲ成立セシムルニ至レリ此北辰會ハ久原ト覺書ヲ交換シ久原スタヘーフノ協約ヲ繼承シ爾後海軍支援ノ下ニ作業ニ着手シ帝國ノ對北樺太油田政策遂行ノ機關トナレルモノニシテ後年ノ北樺太石油會社ノ前身ナリ北辰會創立當時ノ規約等別紙ノ如シ

（註）大正八年一月以來久原ニ對スル督勵ヨリ延テ北辰會成立ニ至ルマデノ交渉斡旋ハ海軍ヲ中心トシテ行ハレタルガ各社夫々ノ立場モアリテ議容易ニ纏ラズ屢々難關ニ逢着セリ而シテ北辰會内勢力ノ配分ニ關シテモ海軍ハ本問題ニ對スル久原ノ優先的位置ヲ認メテ全体ノ半分ヲ有セシメ（久原ハ三菱トノ内約ニ據リ更ニ之ヲ兩者ニ折半スルモノトス）殘リノ半分ヲ日石、寶田、大倉組ニテ三分スルヲ至當トセルニ對シ日、寶兩社大倉組ハ初メ全体ヲ平等ニ分配セラレンコトヲ希望シ就中大倉組ハ最モ强硬ニ之ヲ主張セシガ結局海軍ノ意見ニ落着スルニ至レルモノナリ是等ノ交渉ニ於テ海軍側ハ主トシテ山口少將（艦政局第四課長事務取扱）其ノ衝ニ當リ會社側ノ竹内維彥、田邊勉吉、櫻井彥一郎、堀哲三郎等（以上久原側）橋本圭三郎（寶田）内藤久寬（日石）門野重九郎（大倉組）

木村久ス彌太（三菱）等ト折衝セリ

（尚大倉組ノ運動ニ關シテハ島田元太郎等ノ關係ト共ニ別ニ之ヲ記述ス）

北辰會規約（大正八年五月）

北辰會規約

（大正八、五、一）

第一條　本會ハ北辰會ト稱シ北樺太油田ニ關スル權利ヲ獲得シ之ガ調査及開發ヲナスヲ其目的トス

第二條　本會會員及其持分ヲ定ムルコト左ノ如シ

久原鑛業株式會社	四分ノ一
三菱鑛業株式會社	四分ノ一
日本石油株式會社	六分ノ一
寶田石油株式會社	六分ノ一
大倉鑛業株式會社	六分ノ一

但シ三菱鑛業株式會社ノ持分ニ關スル一切ノ權利義務ハ同社ト久原鑛業株式會社トノ内約ニ依リ當分後者ニ於テ代理スルモノトス

第三條　本會ハ大正七年五月二十一日露國イワン、スタヘーフ商會ト日本久原鑛業株式會社トノ間ニ協定セル覺書ニ基キテ久原鑛業株式會社ノ保管セル一切ノ權利義務ヲ繼承シイワン、スタヘーフ商會ノ現所有シ又將來獲得スベキ北樺太ノ石油特許區域又ハ石油鑛區ニ對シ起業的調査ヲナスモノトス

第四條　本會ハイワン、スタヘーフ商會ヲ督勵且援助シテ現在同商會ノ有スル北樺太石油鑛區ヲ完全ニ保有セシメ又將來其獲得ヲ爲サシムルモノトス

第五條　本會ノ事業範圍ヲ北樺太石油地全部トシイワン、スタヘーフ商會ノ所有セル鑛區以外ニ於テ之ガ權利ヲ獲得スル爲本會員中一二ノ名義ヲ以テ露國官憲又ハ露國資本家ト交渉協定スル場合アルモ之ニ由リテ獲得スル鑛區ノ權利義務ハ一切本會ニ提供セラルベキモノトス

第六條　本會員ハ本會ヲ離レテ北樺太ノ石油鑛業ニ關係セザルモノトス

第七條　本會ハ起業的調査ノ成績ニヨリ何時ニテモイワン、スタヘーフ商會ト合同シテ事業會社ヲ組織スルモノトス

第八條　本會ノ要スル一切ノ費用ハ會員各自ノ持分ニ比例シテ分擔支出スルモノトス

第九條　（省略）

第十條　（省略）
第十一條　本會加入當事者ハ各一名ノ代表者ヲ出スモノトス其代表者ヲ理事トス但シ（省略）
第十二條　（省略）
第十三條　（省略）
第十四條　（省略）
第十五條　（省略）
第十六條　本會ノ存續期間ヲ大正八年五月以降滿三ケ年ト定ム
但シ場合ニ依リテ其期間ヲ延長スルコトヲ得ルモノトス

（終）

右ノ規約ハ久原鑛業株式會社久原房之助、日本石油株式會社内藤久寛、寶田石油株式會社橋本圭三郎、大倉鑛業株式會社大倉喜八郎署名セリ
而シテ成立當時ノ役員左ノ如シ

専務理事　田邊勉吉（久原代表）
理事　田中次郎（日石代表）

同　津下紋太郎（寶田代表）
同　門野重九郎（大倉代表）
參與　櫻井彦一郎
北樺太鑛場總監督　成富道正

海軍地質調査隊ヲ派遣ス（大正八年）
北辰會試掘ニ着手（大正八年）

然ルニ本事業地ノ原始的ニシテ氣候酷烈年間作業ニ適スルハ夏期三四ケ月ニ過ギズ交通不便ニシテ道路港灣ノ見ルベキモノナキ等ノ關係上一井ノ試掘ニ尚且ツ數十萬圓ヲ要スル事情アルコト又スタヘーフ先願ノ鑛業權モ未ダ露國官憲ノ許可ヲ得ルニ至ラズ加フルニオムスク政府ハ曩ニ（大正八年二月）北樺太ニ於ケル鑛業ノ新規出願ヲ禁止セルノミナラズ由來露國法律ニ於テハ閣議ヲ經テ主權者ノ裁許ヲ得タル場合ノ外總テ外國人ガ樺太ニ於テ石油鑛業ヲ經營シ又ハ石油鑛業會社ノ株主タルコトヲ得ザル等ノ規定アルコト等ノ爲メニ右北辰會ノ態度モ兎角消極的ニシテ遺憾勘カラズ由テ海軍ハ極力之ヲ督勵スルト共ニ年初來ノ計畫ニ基キ自ラ現地ニ進出シテ全般ヲ誘導シ且ツ海軍ノ覺悟ヲ示シテ勢ニ乘ジテ自然ト事業ニ深入リセシムルノ要アリトナシ農商務省技師ノ外北辰會關係各社ノ技師ヲモ海軍省囑託トシテ五班ヨリ成ル地質調査隊ヲ派

海軍チヤイオ無線電信ヲ設ク（大正八年）

遣シ尚北辰會ノ試掘作業ニ對シテハ北海方面ニ行動ノ海軍艦船ヲシテ人員、機械、材料物品等輸送ノ便宜ヲ供與セシメ同年九月ニハ**チヤイオ**ニ無線電信ヲ建設シテ通信ヲ開始スル等大ニ之ヲ支援シ山口少將、宮本機關中佐等モ現地ヲ巡視シテ諸員ヲ鼓舞督勵セリ

（註）前年**スタヘーフ**ノ出願セル鑛區ハ其後未ダ許可ノ運ビニ至ラザリシガ之等ノ作業ハ亞港鑛務官**オリシエフスキー**ノ諒解ヲ得テ行ハレタルナリ

尚右**オリシエフスキー**ハ概シテ我方ニ好意ヲ有シ後年我軍事占領後ハ軍政部及海軍ノ囑託ヲ承ケタルコト後ニ述ブルガ如シ

海軍地質調査隊ノ編成（大正八年）

右海軍調査隊ハ農商務技師小林儀一郎ヲ首班トシ其ノ編成左ノ如シ

	地質技師	測量技手	配置
第一班	寶田技師 内田涵二	（寶田）西野平次郎	**ルンスキー**潟以南ノ産油地
第二班	久原鑛業技師 石田義雄	（久原）高橋榮太郎	**ルンスキー**潟以北 **ヌイスキー**潟ニ至ル産油地
第三班	日石技師 池上隆	（日石）田口在中	**チヤイスキー**潟ニ望メル産油地域
第四班	農商務技師 植村登巳男	農商務技手 本間右京	**オハ、エハビ**附近
中央班	農商務技師 小林儀一郎	農商務技手 堀内榮雄	**チヤイスキー**潟ニ望メル **ハンドウザ**川口方面

海軍地質調査隊ノ行動（大正八年）

之等ノ調査隊ハ特務艦膠州及運送船泰安丸ニ便乘シテ大正八年五月下旬小樽出港北航セシガ季節尚早キニ過ギシタメ流水ニ妨ゲラレテ一旦引返ヘシ更ニ六月下旬ヨリ七月一日迄ノ間ニ北航夫々分擔ノ各方面ニ上陸シ八月下旬迄陸上ニ於テ調査ニ從事シ九月何レモ小樽ニ歸着セリ

斯ノ如ク天候等ノ關係上其ノ調査期間僅カニ二ケ月ヲ出デズシテ豫期ノ如ク廣ク精査ヲ遂行シ得ルニ至ラズ尚多クノ將來ノ調査ニ殘スノ止ムナキニ至リタルモ兎モ角各班ノ調査區域ハ合計百余平方里ニ及ビ從來不明ナリシ產油地地質構造ハ略ボ之ヲ明カニシ少クモ**エハビ**ヨリ**アチヤツプ**附近ニ至ルモノ及**ピリツン**川ヨリ**ヌトウ**川ヲ横切リ**ワール**川ニ至ル延長十里ニ達スル大規模ノ背斜層ヲ存シ產油地トシテ頻ル有望ナルコトヲ明カニセリ（調査報文省略ス）

北樺太沿岸測量（大正八年）

海軍ハ又夙ニ露領樺太沿岸測量ノ必要ヲ認メ既ニ大正八年一月ヨリ之ヲ計畫シアリシガ同年四月其ノ內密施行方ヲ布目水路部長ニ訓令セラレタリ卽チ水路部ニテハ左ノ通測量班ヲ編成何レ

モ五月出發北發北緯五十度以北ノ樺太東海岸全部及西岸**タムレボ**ニ至ル測量ヲ了シ同年九月歸京セリ

第一班　北緯五〇度乃至五二度　小川水路中佐、袴田技師等

第二班　北緯五二度乃至五四度　大林技師　竹田水路少佐等

第三班　北緯五四度ヨリ西岸**ゴロバチエバ**岬迄

藤澤水路少佐、露木水路少佐等

北辰會試掘井開坑（大正八年十二月）

一方北辰會ニ於テモ前記ノ如ク愈試掘ノ計畫ヲ決シ右海軍ノ調査ト連絡シ二臺ノ綱掘鑿井機ヲ送リ**バターシン**及**ノグリツク**ノ二個所ニ試掘冬營ノ準備ニ着手シ内**バターシン**ハ八年十二月ヲ以テ開坑シ引續作業ヲ進行シ翌年ニ入レリ

我企業ノ進出ニ對シ露國側ノ情況

然ルニ之等東海岸ニ於ケル我顯著ナル進出殊ニ無線電信建設ノ如キハ大ニ尼港方面露國官民ノ物議ヲ招クニ至レリ而モ北辰會ノ事業ニ對シ同會ト在露ノ**スタヘーフ**側トノ意志疎通充分ナラザリシタメ日本側ガ日露共同ノ名ノ下ニ一切ヲ壟斷セントスルモノナリト誤解セラレ稍モスレバ露國官民ノ間ニ反坑的運動ヲ生ジツツアリトノ情報アリ之等ノ情勢ニ顧ミ北辰會試掘作業ノ如キモ海軍ノ之ニ關與セルコトニ付テハ出來ル丈ケ露國側ニ漏レザル樣配慮セリ又一方島田及大倉組派遣員等ハ依然北辰會トハ別箇ニ露國側ニ對シ油田獲得運動ヲナセルモノノ如ク之等幾多ノ事情ハ成行如何ニ依テハ其結果憂フベキモノアルヲ思ハシメタリ

元來當時ノ北辰會ノ事業ノ如キモ要スルニ我事業家ト一露國商會トノ假契約ニ其基礎ヲ置ケルニ止マリ何等露國官邊ノ確タル保證ヲ得アル譯ニアラズシテ利權ノ根底ニ不安ヲ免レズ今ヤ現地ノ調査ニ依リ油田ノ價値ヲ確メタル以上前記四圍ノ情勢ニ顧ミルモ此際速ニ機宜ノ處置ヲ講ジ對露利權ヲ確定スルノ必要ヲ認メラレタリ（當時北辰會モ亦利權ノ安定ニ關シ海軍大臣ニ陳情セリ）

即チ大正八年十一月海軍ノ提案ニ據リ閣議ハ左記覺書ヲ決スルニ至レリ

油田利權ヲ確定スルタメ**オムスク**政府ト交渉ノ方針ヲ執ル

（大正八年十一月）

大正八年十一月二十一日

海軍大臣
陸軍大臣
農商務大臣

覺書

露領樺太ニ於ケル油田ノ開發ニ關スル件

露領樺太ニ於ケル油田ノ開發ハ我國防上及產業上極メテ重大ナル關係ヲ有スルニ付帝國政府ハ露領樺太ニ於ケル油田ノ開發ハ我國防上及產業上極メテ重大ナル關係ヲ有スルニ付帝國政府ハ之ヲ解決スルノ目的ヲ以テ事情ノ許ス限リ速ニ**オムスク**政府ト適當ナル打合ヲ開始スルノ最緊急ナルヲ認ム

理由　露領北樺太ニ於ケル企業ニ關シ其大体方針ハ本年四月一日及同五月二十日ニ於ケル閣議ノ際內定シタル所アリ其中石油問題ニ就テハ本年夏期海軍省囑託農商務技師ノ實地調査ヲ經タルニ其成績極テ有望ニシテ油田ノ區域モ亦從來既知ノモノヨリハ遙ニ廣ク分布シ將來之ガ開發ニヨリテハ帝國ノ最緊急事項タル石油燃料問題ヲ解決シ得ベキ望アリ

露領樺太ニ於ケル油田中其若干鑛區ニ關シテハ目下久原鑛業株式會社、三菱鑛業株式會社、大倉鑛業株式會社、日本石油株式會社及寶田石油株式會社ノ五會社協同ニ成レル北辰會ニ於テ之ガ開發ニ着手シ施設頗ル其歩ヲ進メタルモノアルモ元來右北辰會ノ事業ハ曩ニ久原鑛業株式會社ト露國**イワンスタヘーフ**商會トノ間ニ締結シタル一個ノ假協約ヲ繼承シ之ニ基キテ開始シタルモノニ過ギズシテ其間毫モ政府ノ保證ヲ經タルモノナシ然ルニ他方ニ於テハ樺太ノ石油事業ニ就キ**オムスク**政府ハ本年二月以降一切ノ試掘ニ關スル新出願ヲ禁止シタルノミナラズ尙露國ノ法律ニ於テハ閣議ヲ經主權者ノ裁許ヲ得タル場合ノ外總テノ外國人ガ樺太ニ於テ石油鑛業ヲ經營シ又ハ石油鑛業會社ノ株主トナルヲ得ザル規定アルヲ以テ若シ此儘ニ經過スルトキハ必ズヤ同政府ト紛議ノ因ヲナスコトハ免レザルベク然ラザルモ既ニ地質調査ノ結果ニシテ有望ナルノ結論ヲ得タル今日ニ於テハ今後外國企業家ト競爭ト干涉トヲ誘起スベク將又**イワン、スタヘーフ**商會ニ於テモ將來如何ナル態度ヲ採ルベキヤ測ルベカラザルモノアリ況ヤ右假協約ニ屬スル鑛區ハ僅々五百余區ニ過ギザルガ故ニ同協約以外ノ鑛區又ハ其他ニ分布スル油田ニ關シテハ一層烈シキ紛雜ヲ惹起スベキコト明ナルモノアルニ於テオヤ

若シ夫レ此ノ如キ事態發生スルコトアラバ其結果ハ極テ重大ニシテ之ガ爲我國ニ於ケル石油燃料問題ノ解決ハ永ク其機會ヲ失フニ至ラントス

之ヲ要スルニ油田ノ價値、其現狀竝ニ關係等ハ大体敍上ノ如クナルヲ以テ今ヤ帝國トシテハ本問題ヲ解決スベキ時機ノ極テ切迫セルヲ認ムルガ故ニ此際政府ハ速ニ本文ノ態度ヲ決シ一方ニ於テハ我實業團ヲ支援シ**オムスク**政府ヲシテ明ニ久原鑛業株式會社對**イワンスタヘーフ**商會假契約ノ事業ヲ認メシメ尙ホ進ンデ殘餘ノ鑛區ニ關シテハ別ニ帝國政府若ハ帝國臣民ノ特權ヲ認メシムルガ然ラザルモ日露兩資本ノ共同經營ヲノミ承認セシムル如ク適當ナル協商ヲナシ露領樺太ニ於ケル一切ノ石油問題ヲ解決シテ此點ニツキ帝國ノ將來ニ對スル國防上ノ基礎ヲ安固ニスルノ最緊要ナルヲ認ムルモノナリ

（終）

オムスク政府倒レ同政府承認ヲ前提トスル我對策ヲ放棄ス（大正九年一月）

右閣議決定ヲ見ルヤ海軍ハ之レガ實現ニ付

一、目下ノ狀勢ニ於テハ何時適當ナル機會ノ到着スベキヤ固ヨリ豫期シガタシト雖モ其到着ヲ待ツトキハ之ヲ逸スルノ虞アルニ付外務大臣ヨリ加藤大使ヘノ訓令ハ先以テ速ニ發令ノ必要ヲ認ムルコト

二、加藤大使ニハ此場合ニ於テ詳ニ石油ノ帝國ニ緊急ナル狀態竝北辰會ノ成立狀況其ノ經過等ヲ了解セシメ置クヲ必要ト認ム依テ此際海軍省陸軍省農商務省等ヨリ加藤大使所在地マデ人員ヲ簡派シ事情ノ疎通ヲ計ルコト

三、前二項ノ實施ニ關シテハ更ニ各省ノ主務者ヲ集合シテ協同促進ノ態度ヲ執ルコト

ノ腹案ヲ決シ爾後大藏、農商務、外務、陸軍各省當局者ヲ海軍省ニ招キ協議ヲ進メ海軍トシテハ特ニ山口海軍少將ヲ特派スルコトトシ準備中ノ處此間**シベリア**ニ於ケル情勢ハ漸次變化ヲ來シ**オムスク**政府ノ**コルチヤツク**軍ハ歐露勞農革命軍トノ戰不利ニシテ十一月**オムスク**ヲ奪ハレ次デ翌大正九年一月革命軍ノ**イルクーツク**占領ト共ニ**オムスク**政府ハ崩壞シ爲メニ同政府承認ヲ前提トセル從來ノ我對策ハ遂ニ之ヲ放棄スルノ外ナキニ至レリ

オムスク政府崩壞後**シベリア**ノ政權ハ逐次革命軍ニ歸シ北樺太方面モ其余波ヲ受ケ一月十四日

シベリヤ方面逐次革命軍ニ歸シ亞港モ過激派ノ侵入スル處トナル（大正九年一月）

北辰會作業員引揚事業頓挫ス（大正九年一月）

アレキサンドロフスク市亦過激派ノ手ニ歸シ北辰會ノ作業地ニモ暴徒襲來ノ説ヲ生ズルニ至リシタメ冬營中ノ北辰會作業隊監督成富道正ハ引揚ヲ決意シ總員ヲ統率シテ邦領ニ避難セリ當時既ニ**チヤイオ**ニ我無線電信設備セラレアリシタメ引揚開始ニ當リ之ヲ内地ニ電報シ樺太廳ヨリハ救援隊ヲ派シ國境附近ニ於テ相合スルヲ得タルモ時恰モ嚴冬ニ際シ行路風雪ノ險惡ヲ冒シ難行二十數日遂ニ途中病ニ倒ルルモノヲ生ズル等頗ル艱難極メタリ斯テ折角意氣込ミタル現地事業モ其ノ最初ノ越年ニ於テ悲慘ナル頓挫ヲ見ルニ至レリ

當時報告セラレタル北辰會作業隊引揚ノ狀況等左ノ如シ

大正九年一月二十四日成富道正ヨリ北辰會ヘ來電

アレキサントロフスクハ過激派軍ニ占領セラレ尼港方面ヨリ過激派襲來ノ虞アリ南樺太ヘ引揚ヲ開始ス二十三日三十一人先發、二十四日六十九人出發、南部ノ八十余名ハ北部員ノ來着ヲ待チ漸次國境ヘ向ハントス、事業地ヲ引揚グルニ當リ一ツモ亂レズ……（中略）……各員自重相助ケ二十余日ニテ散江ニ立チ去ル見込ニ付敷香支廳長ヘ東海岸ヨリ連絡ヲ取リ呉ルル樣電報アリタシ本信ヲ以テ無線電信ノ最終トス遙カニ御健康ヲ祈ル

北辰會引揚要領

大正九年一月十四日亞港過激派ニ占領セラル次デ樺太漸次不穩トナル、北辰會引揚ニ決ス

一月二十三日	**チヤイオ**鑛區	三十二人	先發		
同 二十四日	右	同	六十九人	出發	
同 二十八日	**ヌイオ**鑛區員	八十七名ハ北部鑛區員ト會合シ出發			
二月七日	樺太廳ヨリ派遣ノ連絡隊ハ國境北方約十五里ノ地點ニテ北辰會先發員ト出會ス 翌八日國境北方二十里ニテ北辰會本隊ニ會ス				
二月十六日	先發隊邦領散江着同二十日本隊散江着				

全員一八八名、中途病氣二十余名、死亡三名

歸還者一八五名

（註）右作業員引揚後二月中旬亞港ヨリノ情報ニ依レバ亞港方面ニハ政變ニ依リ格別ノ不安ナカリシ趣ナリシガ油田作業地ハ暴徒ノタメ機械諸物資等掠奪破壞セラレタリ

北遣支隊ヲ亞港ニ急派ス（大正九年二月）

尼港方面情勢惡化

斯ノ如ク北樺太方面ノ情勢不穩ヲ報セラルルヤ大正九年二月海軍ハ居留民保護ノタメ北遣支隊（軍艦三笠、見島）スルコトトセリ

北遣支隊ハ同月中旬小樽出港十五日**ウスチエ、アグネオ**沖ニ達ス時ニ沿岸氷結軍艦ノ行動意ノ如クナラズ亞港ヘノ進出不可能ナリシヲ以テ迎三笠艦長（邦一）ハ副長牛島中佐等ヲ同地ヨリ陸露亞港ニ派遣スルコトトセリ「行ハ漸ク二月二十日辛ジテ氷上ノ險ヲ冒シ**アグネオ**ニ上陸亞港在留ノ高村等ニ迎ヘラレ具ニ難行シ翌二十一日亞港ニ到着セリ時ニ亞港ハ既ニ一月十四日以來過激系ニ依リ露領樺太臨時聯合行政委員會ナル名ノ下ニ政權ヲ掌握セラレアリノガ右三笠派遣隊ハ政權當局ニ對シ帝國臣民ノ生命財産ノ保護ヲ交渉誓約セシメ二月二十四日歸艦三笠ハ同月末小樽ニ歸着セリ

小樽ヨリ同艦ニ便乘セル北辰會派遣ノ内藤技師以下四名ノ一行モ右三笠派遣隊ト行ヲ共ニシ亞港ニ於テ**スタヘーフ**商會ノ**ムロギン**及**ポレボイ**ト會見シ同地ノ實情ヲ視察シテ歸來セリ

之ヨリ先沿海州**ニコラエフスク**ニ於ケル我守備隊ハ一月下旬過激派ノ襲擊ヲ受クル等形勢惡化セル爲帝國ハ二月十三日**ニコラエフスク**救援ノ爲メ陸兵派遣ヲ決セラレシガ而モ幾何モナク現地ニ於テ彼我講話ノ約成レルト竝ニ沿岸氷結ノ爲一時派兵ヲ中止セリ然ルニ三月上旬尼港ニ於

我陸軍亞港上陸（大正九年四月）

過激派軍尼港ニ於テ邦人全部ヲ殺害シ所謂尼港事件惹起ス（大正九年五月）

我軍尼港占領（大正九年六月）

グリゴリエフノ亞港ニ於ケル行動顚末（大正九年四月）

海軍**グリゴリエフ**ヲ排ス

テ再ビ戰鬪アリテ我軍民ノ被害甚大ナリトノ報アリ即我尼港派遣隊ハ北遣支隊援護ノ下ニ四月十九日小樽發同二十二日先ヅ**アレキサントロフスク**港ニ達シ同地ニ上陸シ待機中同月末沿海州方面停戰ニ關シ日露軍事議定書ノ成立ヲ見ルニ至リシガ翌五月二十五日過激派軍ハ尼港ニ於ケル殘存邦人全部ヲ殺害シ未曾有ノ慘事ヲ惹起セリ

我陸軍ノ一支隊ハ五月中旬解氷ヲ待テ**デカストリノ**ニ上陸シ次テ主力部隊ハ**サバブ**沖ニ達シ漸次**ボート**ニ依リ溯航**ニコラエフスク**ニ進ミ六月三日之ヲ占領セリ

之ヨリ先我陸軍部隊亞港ニ上陸スルヤ其ノ監視下ニ同地ノ自治ヲ認ムルコトトセシガ帝政時代ノ薩哈嗹州知事ニシテ往年極東工業會社ノコトニ關係セル**グリゴリエフ**モ同地ニ至リ北樺太ニ獨立政府樹立ヲ企テ陸軍側ニテモ之ヲ支持セントスルモノアルヤニ報ゼラレタリ

而シテ右**グリゴリエフ**ハ自ラ油田ノ權利ヲ握リ**スタヘーフ**ヲ排シテ他國ノ資本ヲ導カントスルノ意圖ヲ有セルモノノ如ク我國ニ不利ヲ招クノ虞アリト認メタルヲ以テ海軍ハ陸軍其他關係省トモ打合セタル上同年五月十日栃内海軍次官ヨリ亞市滯在中ノ近藤軍令部參謀（信竹）ニ對シ

「（前略）又**グリ**ハ**スタヘーフ**商會ヲ倒スヲ其施政方針ノ一ツトナス趣ノ處其眞意ハ固リ不明ナルモ同商會ノ存立ハ北辰會將來ノ事業遂行上絶對ニ必要トスルヲ以テ**グリ**ノ敍上ノ企ニ對

シテハ極力之ヲ防壓阻止スルヲ必要トス以上實行ニ關シテハ便宜三笠艦長、花岡外務書記官ト協議セラレシ尚ホ**スタヘーフ**商會ヲ支持スルコトニ關シテハ陸軍、外務兩大臣ヘ協議シ兩大臣ヨリ各當事者ヘ電報ノ筈」

ナル旨ヲ電報セリ斯クテ近藤少佐等現地ニ在ル職員ハ右ノ主旨ヲ体シ陸軍派遣隊長其他ニモ交渉ニ努メ**グリゴリエフ**自身モ亦**スタヘーフ**北辰會其他ノ反對ニ會シ到底自己ノ抱負ヲ實現シ難キコトヲ考ヘタルモノノ如ク五月下旬内地ニ歸リ結局同人ノ登場ヲ見ルニ至ラズシテ止ミタリ

（註）**グリゴリエフ**ニ關スル樺太鑛務官**オリセフスキー**ロ述要旨ハ既ニ第一章英國會社ノ記事中ニ述ベタルガ尚同人ノ行動ニ關スル櫻井彦一郎手記（大正九年四月）摘要左ノ如ク參考ノタメ附記ス以テ同人ノ亞港渡航前ニ於ケル狀況ヲ窺フニ足ルベシ

グリゴリエフ氏ハ大正六年日本ニ來リ久原ニ對シテ極東會社ノ談ヲ持込ミシモ同人ノ說明不徹底ナリシ爲何等ノ進行ヲモ見ザリキ　然ルニ彼ハ同年秋ノ頃歸國シ爾來消息ヲ絕チ時ニハ過激派ノ爲ニ殺害セラレタルヤノ噂モアリタリ

大正八年六月ニ及ビ**グリゴリエフ**氏ハ突如トシテ横濱ニ現ハレ彼ハ露國ニ於テ過激派ノ爲ニ捕ハレシモ僅ニ身ヲ以テ免レ英國軍艦ニ助ケラレテ英國ニ渡リ該國ニ在ル友人ノ援助ヲ受ケテ加奈太ニ趣キ夫ヨリ日本ニ來リタル旨ヲ告ゲ窮狀ヲ訴ヘタリ而シテ彼ハ予ニ示スニ倫敦ナル樺太油田會社ノ委任狀ヲ以テ之ニヨリテ**オムスク**政府ニ對シ**スタヘーフ**商會ニ屬スル樺太油田中五十鑛區ノ回復ヲ計ルベク假令裁判ニ由ルトモ英國側ニ取戻スベシト主張シタリ予ハ其ノ事ノ彼ガ爲ニ不利ナルヲ以テ其ノ委任權ヲ行使セザルベキヲ勸告シ傍ラ彼ヲ懷柔シ置キタリ

サレド彼ハ其後生活ノ窮迫ヨリ種々ノ方面ト關係ヲ結バントシ從ツテ予ニ遠ザカリ居タリ要スルニ彼ハ樺太油田會社ニ對シ極東會社以來ノ深密ナル緣故アルト又自己ノ利益上トヨリ到底彼ノ委任權ノ行使ヲ斷念スルコトナカルベク又樺太油田會社ニ對スル義理合ヨリ同社ニ有利ナル行動ヲナスコトニ努メザルベカラザル立場ニ在ルコトト思フ」

此間北辰會ヨリ派遣セル成富道正等ハ亞港ニ在テ**スタヘーフ**商會ノ**ムローギン**、**ポレボイ**等ト連携シ鑛務官**オリセフスキー**ヲ說キ曩ニ**スタヘーフ**商會出願中ノ油田鑛區竝ニ其他ノ油田ノ鑛業權許可ニ關シ運動シ遂ニ年（九年）二月乃至五月ノ日付ヲ以テ油田五三五鑛區ノ試掘ヲ**スタヘーフ**ニ許可セラルルニ至レリ

（註）此ノ許可鑛區ハ後日我軍政ヲ布カルルニ及ビ更ニ審査ノ上大正十一年初テ軍ノ正式許可

スタヘーフ出願中ノ油田鑛區露國鑛務署ノ許可ヲ受ク（大正九年）

ヲ得ルニ至レルコト後ニ述ブル處ノ如シ

而シテ北辰會ハ曩ニ（九年二月）現地作業隊ノ受ケタル大打擊ノタメニ氣力頓挫シ同年五月同會幹部（橋本圭三郎、內藤久寬、門野重九郎、竹內維彥）ハ海軍大臣ヲ訪ヒ事業再擧ノ件ニ關シ資金其他ニ付海軍ノ援助ヲ懇請セリ

海軍ハ前後ノ事情ニ鑑ミ前年來ノ方針ニ基キ飽クマデ油田ノ開發ヲ所期シ不取敢當事者ガ必要トスル人員材料ノ運搬其他ニ關シ出來ル丈ケノ援助ヲ與フルコトトシ且ツ經費ノ支出ニ關シテモ省內ニ於テ詮議ニ着手セリ

斯カル間ニ尼港方面ニ於ケル我作戰ハ既ニ記スガ如ク進展シ遂ニ大正九年七月三日帝國ハ**サカレン**州軍事占領ヲ聲明シ茲ニ事態ハ一變シ爾後北樺太油田モ我軍政下ニ置カレ海軍ハ自ラ油田調査費ヲ支出シ北辰會ヲ援助督勵シテ積極的ニ事業ヲ進ムルコトトナレリ之等軍事占領後ノ處置經過ニ付テハ第三章ニ記述スベシ

（終）

帝國薩哈嗹州軍事占領聲明、情勢一變（大正九年七月）

薩哈嗹州軍事占領聲明（大正九年七月）

第三章　軍事占領後ノ經過（占領終了迄）

前章ニ記述スルガ如ク我軍ハ大正九年六月尼港ヲ占領スルニ至リシガ翌七月三日帝國ハ尼港事件ニ對スル保障トシテ左ノ通薩哈嗹州ノ軍事占領ヲ聲明シ更ニ同九月十日閣議ヲ以テ占領スヘキ地點ヲ露領樺太全部及尼港、**デカストリー**、**ソフイスク**、**マゴ**ト定メタリ

軍事占領聲明（大正九年七月三日）

本年三月十二日以來五月末ニ亘リ**ニコラエフスク**港ニ於テ帝國守備隊、領事館員及在留臣民約七百名老幼男女ノ別ナク同方面過激派ノ爲虐殺セラレ其狀誠ニ悲慘ヲ極ム帝國政府ハ國家ノ威信ヲ全ウセンガ爲必要ナル措置ヲ執ラザルベカラズ然ルニ目下實際上交涉シ得ベキ政府ナク如何トモスル能ハザル情況ニ在ルニヨリ將來正當政府樹立セラレ本事件ノ滿足ナル解決ヲ見ルニ至ルマデ薩哈嗹州內ニ於テ必要ト認ムル地點ヲ占領スベシ

後貝爾方面ニ關シテハ**チエツクスローヴアツク**軍ガ同方面ヨリ全然撤退セル今日ノ事態ニ鑑ミ帝國政府累次ノ聲明ニ基キ今回同地方ヨリ撤兵スルコトニ決定セリ但シ浦鹽斯德方面ハ朝鮮ニ對スル脅威排除セラレザルノミナラズ却テ惡化セントスル傾向アリ且多數ノ本邦人同地